

---

# 紅い瞳に映る赤

雨雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅い瞳に映る赤

### 【Zコード】

N2975M

### 【作者名】

雨雨

### 【あらすじ】

“吸血鬼”

それは紅い瞳、白髪の人型生物。

人よりもはるかに高い身体能力と異常なまでの再生能力を持ち、動物の肉—特に人を好む—を食する。

人々は吸血鬼におびえながら抵抗を続け、いくつかの国家を作り上げていた。

そんな吸血鬼に育てられた過去を持つ人間、ダイルは現在、ルティル国軍第三部隊副隊長となっていた。

ダイルは生き別れた吸血鬼の“義母”を探しながら、今日も義母の同族をその手にかける。

ある日、一匹の吸血鬼がダイルの前に現れ、違う名で呼んだ。

“ナクタルシータ”と。

それは、義母の消息に、そして自分が何者であるのかにつながるキーワード。

## プロローグ（前書き）

この小説に出てくる吸血鬼とは、いわゆるドラキュラ的吸血鬼ではなく、作者の独自の定義に基づく“生物”です。

吸血鬼という仮称を「えられたまつたく異なる生物だと思つてください。

ドラキュラ的吸血鬼モノを期待して来られた方には申し訳ありません。

## プロローグ

“吸血鬼”

動物の血肉、特に人間を糧とする種族。

彼らが吸血鬼と呼ばれる由縁は、白い髪、紅い瞳で日の光を嫌うからだと言われている。

が、彼らは日中でも活動可能である為、その由縁が正しいかは不明。それらが現れたのは、遠い昔、“緋薬”という薬を一部の人間が飲んだせいである、と言伝えられているが、確かな事は不明。

ルテイル国立歴史館のデータより抜粋

僕らが幼いころ、僕らは養母ははが大好きで、彼女は僕らの憧れだった。

白いウェーブの長い髪と、綺麗な真紅の瞳の彼女は母親を知らない僕らにとって母親という存在がどういうものかを教えてくれた。優しくて、けれども怒ると怖くて、そしていつも暖かい愛情で僕らを包んでくれる彼女が大好きだった。

僕らはみんな仲良しで、血は繋がつてなかつたけれど、友人という存在よりも、もっと強い絆で結ばれていた。きっと大人になつても、いつまでも僕らは一緒に養母と暮らせると思ってた。

そう、僕らがお前たちの望みは何だ、と聞かれたら、迷わずこう答えただろう。

“養母と僕ら、みんなで変わらず暮らす事”

それが僕らの無言の約束。

けれど、僕らの望みも約束も、養母と同じ髪と瞳の奴らに引き裂かれた。

そいつらは養母がいない時やつてきて、その中の一人、三つ編みの女が僕らを見るなり言つたんだ。

「食つていいぞ」つて。

僕らは最初、いつたい何のことなのかさっぱりわからなかつた。  
けれど僕らの一人が傍にいた白髪の仲間の一人に左腕をいきなり  
齧られて、その意味がわかつた。

僕らの一人の腕が紅く染まり、大量の血が逆りながら飛び散つた  
のを見て僕らは何が起こり始めたのかを知つた。

僕が何故助かつたのかは覚えていない。

覚えているのは、逃げ惑う僕ら兄弟が、白髪の奴らに一人、また  
一人と血塗れにされるのを横目で見ながら、必死に逃げた事だけだ。  
その後どこをどう走つて、僕だけが逃げおおせたのか。

気が付いた時には、僕は緑色の光のドームに覆われた街を目指す  
トラックの中にいた。

そして僕は知つたのだ。

養母も含め、あの白髪の奴らが、僕らとは違つ生き物だという事  
を。

彼らにとつて、僕たち人間は食料で、彼らがこの世界の食物連鎖  
のピラミッドの頂点に立つ存在だという事を。

彼らは僕ら人間にこう呼ばれている。

“吸血鬼”、と。

## プロローグ（後書き）

初めて書いた小説なので文章や表現等、つたない部分が多くあると  
思いますが、読んでいただけたと幸いです。

襲撃されたトラックは三台。

一つの荷台には食料等の物資を積んでいた。  
後の二つには物資の他にそれを警護する人間がそれぞれ十五人ほど乗っていた。

報告内容は、全滅、という言葉が強調された。

襲撃した奴らが何者かは明白すぎて言及などされない。

被害者たちの死体及び荷物の回収は行う必要が無い、との事。

おそらく死体は無い、と見ていいだろう。

どうせ彼らの胃袋に収まっているのだから。

見つかった所で骨や肉片や食べ残しが見つかるだけだろう。

けれど、僕はいつもの様に一人で見に行つてみた。

もちろん、相棒は連れて行つた。

現場は、ルテイルの国境、えいりょくへき永緑壁と呼ばれる緑色の光のドームから約四十キロほど離れた地点。

そこは隆起の激しい地形で、大きな岩が其処彼処に転がる所である。

それ故に、見通しも悪く、奴らの襲撃に一步後れを取つたに違いない。

僕らが、永緑壁外へと出るときに必ず装備するゴーグルは吸血鬼の存在は感知できるけれど、その姿を肉眼で一度確認しない限り捕捉することは不可能なのだ。

現場の状況はといふと、簡単に短く言えば惨状。

長々と言えば人間を食い散らかした残骸、骨とか、肉片とか、千切れた指とか、皮膚かわこと引き抜かれた髪とかがそこら中に散らばつて、土が被害者たち + の血で赤黒く斑点模様、いや、全体が染まっているって言つていいかもしないになつて、夏の湿気と暑さで吐きそうな位の悪臭が漂つっていて、早くも蠅や蛆虫が死体に

群がつてて、あと言う事が有るとするなら…吸血鬼の生首とか、その胴体とか、奴らの頭が撃ち貫かれた死体も数体転がつて感じだ。

見慣れてしまつたとはいえ、この光景には胸が悪くなる。

この悪臭も耐え難い。

これはもう、じつくり眺めてなんかいないでさつさと作業を終わらせてしまつに限る。

腰に提げたウェストポーチのサイドポケットからゴム製の手袋を取り出して身に着けた。

胸ポケットから小刀を取り出して、まずはすぐ傍の人間の残骸から採取し始めた。

被害者それぞから採取した肉片や髪、骨などは小さなビニールパックに一つ一つ入れて、ウェストポーチの中に収める。

一時間くらいかかるかもしない。

手持ちのビニルパックは無くなつてしまつたが、まだ採取してない被害者が数人いるようだ。

なにしろ、ちぎられた残骸は四方八方に飛び散つていて、どれが誰だかの判別がいまいちだつたから。

「知能あるくせに、行儀悪く食い散らかすなよ」

ついそんな独り言を漏らしてしまつた。

言つたついでといつたら悪いが、足元に転がつていた吸血鬼の胴体を思いつきり踏みつけてやつた。

不思議な事に、吸血鬼は他の動物は襲うくせに、自分の同種は絶対に食べない。

だから、ルテイル国外で発見される死体で、発見が早ければ（腐蝕が進んでいなければ）、その死体が人間か吸血鬼であるかは、子供でも見分けが付く。

人間は残骸、吸血鬼は首無し・生首・頭を何かで貫通したのいづれかの死体といったふうに。

ま、説明したところで僕のような兵士しかお目にかかる機会など

ないだらうし、誰が聴いているって訳でもないけれど。

とにかく、これ以上作業を続ける事は出来ないので、僕は乗つて  
きたバイクをリモコンで呼ぶ。

呼ばなくて四百メートルくらい向こうに止めてあるから歩いて  
いけばいいんだけどね。

ところが、数分も待たずに来るはずのバイクが来ない。

おかしいな、と思つて近くの高い場所に登つてバイクを停めた方  
角を見た。

バイクの輪郭が辛うじて見える。

その周りに、何か、動いているものが。

僕は、あまり目のいいほうぢゃないから、よくわからぬけど、  
僕のバイクが動いていない事は確かにようだ。

なぜ僕のバイクが動いていないのか、ある程度予測はついたが、  
はつきりしないのは気分が悪い。

僕はバイクに向かつて歩き始めた。

バイクまであと六十メートルくらいの地点に来ただろうか。

首にかけていた「ゴーグルのランプ」が一回、点灯した。

ゴーグルをきちんとかけて見ると、ゴーグルの視界色はいつもの透明ではなく、黄色。

これは、注意しろ、という意味の色。

近くに吸血鬼がいる。

僕はゴーグルをかけたまま、バイクの形や色が何とか判別できるくらいに近づいた。

岩陰からそつと様子を伺うと、バイクはグチャグチャに解体されていた。

そこには黒い服を纏つた、白髪緋眼の人型の生き物が三匹、僕のバイクを囲むようにうろついていた。

少し猫背気味の姿勢で、低く唸つては辺りを見回している。

たぶん、近くに人間がいると判断し、逃走手段を奪つて持ち主が戻つて来たところを襲おうと待つているつもりなのだろう。

吸血鬼は、知能があるといつても、僕ら人間と比べて、やっぱり頭が悪いと思う。

例え待つっていても、待つている間に別の場所で他の吸血鬼に見つかって食べられるという可能性を考えたりしないのだろうか？

バイクが放置されてどのくらい時間が経っているかなど、考えているのだろうか？

放置されて半年以上経つてゐかもしぬれないので、という可能性もあるだろうに。

そうでなくとも、バイクがあることによって、近くに人間がいると判断したのなら、その辺を探す、くらい頭を働かせねばよいのに。

なんだか苛立たしい。

そう、僕は吸血鬼たちのこういう頭の悪いところを見ると、無性に苛立しくなる。

僕の養母は、吸血鬼だった。

けれど、彼女は決して頭が悪くなかった。

むしろ聰明で頭の回転の速い賢い女性だった。

僕の欲目も入っているかも知れないが、こんな奴らに比べるべくもない女性だったのは確かだ。

それなのに、養母はこんな奴らと同じ種族らしい。

こんな頭の悪い連中と僕の養母が同じモノだという事が、どうしようもなく腹立たしく思う。

はっきり言って、こんな奴らと養母を同じモノと思う事も、思われる事も不愉快だ。

僕は眉を顰めてズンズンとそいつ等に近づいていった。  
近づく間に視界色を透明に設定しなおし、戦闘モードに切り替える。

一匹が僕に気付く。

気付いたヤツは雄のようだ。

野太い奇声を上げながら、口から涎をダラダラと垂れ流して突進してくる。

他の一匹　内一人は雌だ　も仲間の奇声で僕に気付き、驚くべき速さで迫ってきた。

これが、吸血鬼。

人間とほぼ同じ姿をしている。

人間の言葉を理解できる。

人間ほどではないが、知能もある。

好物は人間。

そして人間には無い異様なスピードと馬鹿力と再生力。

生身の人間なら、一瞬にして喰われてしまうだろう。

そんな相手に僕は真正面から向き合つた。

僕には奴らに負けない自信があるからだ。

人間が、人間という種族を絶やすことなくこれたのは、たった一つモノのおかげだと僕は思う。

永緑壁えいりょくへきと科学だ。

永緑壁は、吸血鬼からルテイル国を守る防護壁。

科学は、人間が吸血鬼に抵抗する手段。

その中でも、僕は科学が生み出した相棒をとても気に入っている。

僕は奴らが迫った刹那、躊躇い無く相棒を鞘から引き抜いた。

僕は鞘から柄だけを抜き取った。

刀身はない。

しかし同時に、引き抜いた柄には淡い緑色に発光するレーザ・サベルが刀身の代りに伸びている。

一匹目。

僕に伸びてきた腕を薙ぎ払う。

吸血鬼の腕が焼き斬れてゴトリと落ちる。

二匹目。

飛び掛つてくる吸血鬼を後ろに跳んで避ける。

力の入れ具合からいって、跳躍距離は多分七メートル位だつただろう。

勿論、こんな事出来る人間なんていない。

僕だつて同じだ。

このジャンプ・ブーツを履いてない限り。

跳ぶ時の姿勢が悪かつたせいでバランスを崩して着地する。

勢いのまま四メートルは後ろに滑り、とっさに左手を地に付けてブレーキをかけ、大量の砂埃を上げたところでやっと止まる。

摩擦で手の皮がズルリと剥けたみたいだったが、そんな事気にはしていなかつた。

すぐ傍に三匹目が迫っていた。

ゴーグルが目標を捕捉する。

下から足の間をすくい上げるように剣を振った。

相手は左足から腰にかけての下半身を斬られてその場の地面に倒

れる。

倒れた相手の首を僕は切断し、その切り離された頭の眉間に刃を突き立てる。

「うしない限り、こいつらは死ない。

脳みそに損傷を受けない限り、もしくは脳からの信号が途絶えない限り、こいつらは再生するのだ。

現に、右腕を斬られた一匹目の奴は、斬りとられた腕を傷口に当てていたらしく、あと一皮で接着する、といった段階まで再生している。

相棒を引き抜き、切った頭を残りの奴らに向かって蹴りやつた。吸血鬼の生首は放物線を描きながら宙を飛び、残った奴らの足元に転がる。

残った一匹は睨みながら慎重そうに間を取つて僕を囲んだ。

僕は、そいつらにニヤリと笑つて言った。

「どうした？ ただの人間一人がお前らと渡り合つているのが珍しいか？」

しかも、こんな子供に、つて？

一匹は険しい顔で更に唸り声を上げる。

言葉を話せない訳ではあるまいに、単純といつか、やつぱり獸というか、呆れる。

僕は右の吸血鬼に斬りかかった。

その刀身を掻もうとした吸血鬼の手が一瞬にして焼き斬れる。

馬鹿だな。

レーザ・サーベルが掻めるわけないじやないか。

仲間の腕が焼き切れたのを見ただろうに。

学習しないヤツは、生き残る事など出来ない。

そのまま左肩から右胸にかけて、分断した。

落ちた上半身を片足で踏みつけて額から上を切断。

コイツも片付いた。

あと、一匹。

思つたとたん、ゴーグルが警告色、つまり、視界が紅くなつた。すぐ横に残る一匹が迫つてゐる、と認識する前に思わず振り上げた左腕に、思い切り咬み付かれた。

悲鳴を上げたのは、吸血鬼の方だった。

口を両手で押さえながら後ろによろめく。

震える手をそつとはずした口は、紅い泡を吹いて、吸血鬼特有の発達した犬歯どころか、歯が殆ど砕けていた。

そのチャンスを僕は見逃さない。

ジャンプ・ブーツで一気に詰め寄つて首を薙ぎ払つた。  
くるくると、放り投げられたボールのように回転しながら、頭は地面に落ちた。

その頭に近寄つて、僕はしゃがみ込んだ。

その真紅の目が痛みと怒りで僕を睨みつける。

まだ、再生する余裕がこいつにはあるみたいだ。

意外と、しぶといじゃないか。

何か言つてるみたいだが、胴体から切断されているため、ヒュウヒュウと笛のように鳴るだけだ。

「不味い腕ですまないね。

こつちは、だいぶ前にお前らの誰かにあげちゃつたんだ。」

そいつ目の前で振つた僕の左の手のひらは、ベロリと人工皮膚が剥げ、中からたくさんの中のコードや金属の骨格が見えていた。

そう、僕の左の肘から下の腕は、義手なのだ。

僕の腕は、五年前に吸血鬼に襲われ、食われた。

その時の記憶は少ないが、逃げている時にルテイル国軍の第三部隊隊長のジェガンに保護され、その後僕はこの腕を貰つた。

ルテイル国に行って初めて、僕は科学を、機械といつもの知つた。

僕は、素晴らしい技術だと思った。

もう諦めていた腕を、元通りとはいえないが、自分の思い通りに動く腕を得たのだ。

しかも僕の義手は、吸血鬼の刃が碎けるほど硬い。一度と左腕を失う」とはないことが嬉しかった。

手を動かす度にパラパラと細かい砂が落ちた。

「ああ、中に砂が入ってるや。またジェガンに怒られる。」言いながら僕は吸血鬼の頭に刃を突き立て、その命を終わらせてやつた。

ゴーグルの視界は既に普通に戻っていた。

「ゴーグルで他にもまだどこかに吸血鬼が潜んでいないか、探索する。

半径百メートル以内に吸血鬼はない。

念のために探索の感度と範囲を上げて確認したが、少なくとも半径5百メートル以内にも吸血鬼はない。

相棒を元の通りに納める。

次に目を向けたのは、僕の乗ってきたバイク。よくもまあ、これだけバラバラにしたものだ。

修理も出来ないほど適当に、細かく解体されていた。これじやあ、歩いて帰るしかない。

ここから歩いたらルテイル国境まで…五時間ってどこかな？ ジャンプ・ブーツを利用して帰るにしても、ちょっと、きつい。ゴーグルについているボタンを操作し、第三部隊本部に連絡を取ることにした。

「あ、もしも……」

「デューテー副隊長？ あんたどこで何してるんですか！」

間髪いれず、大音量の四十歳位の男性の声が耳にキーン、と響いた。

そんな大声でなくても、十分聞こえるつてば。

思つたけれど、口にはしない。

「おお～ガヴィール。今日非番じやなかつたつけ？ 何で君が出るのさ？」

「誰のせいですか！」

「……もしかして、僕のせいかな？」

「首絞めてやりましようか？」

「恨みがましい声である。

思わず苦笑いが漏れる。

「ま、そんな事よりヤー、あれだよ。

この前の食料ダメにされた辺り。そこにいるんだ

「ああ、ああ、わかつてますよ。そんなこいつたひーと思つてました

！」

そんなこと呼ばわりされたせいか、やけっぱちの様な口調でガヴイールは応対する。

「そんなに拗ねるなよ。今、現在位置調べるか」

「ゴーグルで座標を調べてガヴィールに伝える。

「うん、そこにいるんだけど、吸血鬼三匹に絡まれちゃってバイク壊されちゃった。

「ほら、僕つてモテるから。やんなつちやうね」

軽口を叩いたのに、乗つてくれなかつた。

「馬鹿いってんじやありません。あんたがそんなトコに行へから悪いんでしょうが。

あんたのデータのおかげでこいつは駆り出されて折角の休みがパ

ーですよー。

家族サービスしないと、うちのヤツはしつこいんですから。

あんたも、仕事だつて言つたときのヤツの田、田一回見てみ

なさいよ。

おっそりじいんですから！

全く、どうしてくれんんですかあーー

最後は泣き落としに掛つてゐる。

親子並みの歳の差の上位にこれほど泣き壇を壊れる奴も珍しい。

しかも、僕が年下である。

ま、そこがガヴィールの素敵などうだと僕は思つてゐるけれど。

「まあまあ、ごめん、僕が悪かった」

「嘘つけ！」

なんともフランクというか、無礼な言い方だけど、僕は気にしない。

だつて、三六歳の大人が、たつた十四歳の僕に従つてくれてるんだから、それこそ物好きとしか言いようがないが、これ位が丁度いい。

「いや、今はさ、それより迎えに来て欲しいんだ。ちゃんと、僕の休暇をその分、君にまわすから。だから、迎えに来てくんない？」

甘えるように言ってみる。

ガヴィールは沈黙する。

怒ってるみたいだ。

かわりに、二十歳半ば位の青年の声が届いた。

「デューター副隊長。今トラックを向かわせますから。

一時間程、待つていてください」

僕はトラックの荷台に乗るのがあまり好きではない。

食料とか荷物を運ぶのに使うのは仕方ないにしても、みつちり人が入った荷台からでは、いざ吸血鬼に襲われた時動きにくいからだ。それなら、バイクの方が動きやすくて好きだつた。正直な僕としては、不満を訴えなければなるまい。

「ええ～？ やだなあ。

いいよ、そんなたくさんで来ないで。

大勢だと吸血鬼に見つかっちゃうじゃん。

ザグラス、君でいいからさ、バイクで来てよ。

「ケツで十分」

「そうですか？ それじゃあ……ああ～、残念でした、副隊長。ガヴィールさんが睨んでますんで、無理っぽいです」

「なんですかー？ ねえ、どうにかなんない？」

「私では不可能ですね。ガヴィールさんを説得する自信がございません」

「こやかな声は、明らかにこの状況を楽しんでいる。

「どうぞ、副隊長が説得なさってください」

「ねえ、ザック。君さあ、やな性格だよね」

「気のせいじゃありませんか？」

「ガヴィールウ～。お願ひー。いいでしょお～？」

「ここで押し問答してゐにまた僕、吸血鬼からダンスのお誘いが  
きちゃうじやん～。

「いくら僕でも、一日に十五も一十五もお相手するのは疲れちゃう  
んだけどお～」

仕方なく、僕は精一杯甘えた口調で頬み込む。

多少軽口を叩きつつではあるが。

「…だつたらトラックを大人しく待つとけばいい事じやないですか  
不機嫌な声が答えた。

「この前貴重な兵士が奴らに三十人以上持つてかれちゃつたばっか  
りだよ？」

これ以上被害を増やすのはどうかと思つた

「そいつのきつかけを作ろうとしてるのは一体誰でしょうかねえ？  
うう、反論できない。

どうしたものか。

そこで、僕ははつと思いついた。

「僕もさ、被害を増やしたいわけじゃないよ。いや、こんなこと言  
つても仕方ないよね。

…うん、正直に言おう。

ガヴィール、僕はね、君に迎えに来て欲しいんだ。ザグラスと。  
だつて、そこら辺の兵士を護衛につけて帰るよりも、そつちの方  
が安全確実なんだから。

なんたつて、一騎当千な君たちだよ？僕はそつちの方がいいなあ  
僕はガヴィールの反応を待つ。

ザグラスが吹き出すのが聞こえた。

次いで、ガヴィールの盛大な溜息が聞こえた。

照れたとか、そんな理由でないことは明白だ。

こんなことで時間をとればとるほど危険が増すことを考慮した、諦めの溜息だらけ。

「仕方ないです。わかりました。ザグラスとバイクで迎えに参ります。

くれぐれも、吸血鬼に見つかれないように隠れて、そこから動かないでくださいね。

あんた、すぐうろちょろするんだから」

くれぐれも、に力を込めて注意したガヴィールとの通信はそこで終わった。

通信機を思いつきり呑きつけるような切り方だった。

やれやれ、毎回のやり取りとはいえ、今日は特に不機嫌だったなあ。

疲れちゃいないけど、首を左右に倒してほぐして、ここで待つていいようか？

僕は目に入ったでっかい岩の上に座つて待つ事にした。  
このあたりでは一番高い場所だ。

多分ここからならガヴィールたちが来るのが見えるだろう。  
よじ登るのは面倒なので、ジャンプ・ブーツで一気に飛び上がって登った。

岩の平らな所に座つて両手を後ろにやつて体重を支えるような姿勢になろうとしたけど、熱くなつた岩は、生身の手の方が火傷しそうな位だったの、諦めた。

仕方なく、今度は義手の方を枕に、生身の腕は腹に置いて仰向けに寝転んだ。

首から上と肘から下の腕以外は、着ている戦闘服が勝手に体温調節してくれるから、岩の熱さは感じない。

空を見上げた。

さつき倒した吸血鬼の死臭だろ？

それともさつきまでいた現場の臭いが風に乗つてきたのだろうか。  
悪臭が一瞬して、あつという間に消え去り、また微かに臭つてくる。

その、繰り返し。

流れる雲だけが、常に変化する。

臭いはサイテーだけど、空の景色は綺麗だなあ。  
いい天氣だ。

と、ゴーグルの視界に通信が入る旨が表示される。  
ザグラスがゴーグルから掛けてきたみたいだ。  
どうしたんだろう。

「何？なんか不都合でも起きた？」

「いいえ、ただ、お伝えしこうかなと思って。

ガヴィールさん、どうやら帰り道も説教する気満々のようですよ。

覚悟決めといたほうがよろしいかと

「うげ…。わかつた。上手い言い訳考えながら待つてゐるから  
イヤフォンの向こうから忍び笑いが聞こえる。

「吸血鬼に見つからない様な所にいてくださいね」

「ああ、うん。わかつた」

しつかり見つかりやすそうな所にいる事は黙つておいた。  
僕は通常モードにしてからゴーグルを外し、今度は自分の目で空  
を見上げる。

ゴーグルを通すのとは違い、直で見る太陽の光が目に痛かつた。  
夏のキツイ日差しがじりじりと僕を焼いているようだ。

かといって、日陰に行く気にはなれない。

鳥肌が立つくらい寒いし、見通しが悪いから。

吸血鬼が近づいてきたとき、見通しがいい方が、対処しやすいいつ  
ていうのが、僕のこだわり。

とはいって、この日の強さはちょっと、ねえ。

矛盾しちゃうけど、片手でウェストポーチからタオルを取り出し  
て、顔の上にかけた。

息苦しいし暑さは増したけど、日の光が多少和らいだ感じ。

一眠りとかしたら、吸血鬼に見つかって寝てる合間に食べられち  
ゃうだらうか？

それとも、ガヴィールたちが先に来て、寝てる僕を連れ帰つてくれるだらうか？

あ、そしたら説教聞かずにするかも。  
いいねえ。

あとは、そうだね。

副隊長は死んだつて事にして、置いてかれるつて可能性もあるか  
な。

もしかしたら、ガキの下にいるなんて真つ平だ、つてガヴィール  
たちに殺されちゃつたりなんかして。

これ、ガヴィールに言つたら顔を真つ赤にして怒るかな？

普通にそのままのつもりでした、なんて言われたらどう切り替えしたらいいだろう？

別に悲観しているわけじゃない。

単に、可能性ってだけ。

もちろん、今挙げた事だけじゃないだらう。

予想外の事もある。

そういうこと、考えるの好きなんだ。  
予想通りであれば、クイズが当たったよう嬉しいし、予想外ならそれはそれで面白い。

とつれに、それに対しても自分がどんな対処をするのか、できるのか。

そういうのって、わくわくしない？

少なくとも、僕はわくわくする。

目覚めた時にどんな状況下にいるのか、ちょっと楽しみだから、寝ちゃおつか。

もしかしたら、一度と目覚めないうこともあるかもしれないけれど、それはそれで、仕方ないか。

だって、眠るってとっても気持ちいいからね。

この誘惑に僕が勝てた事は一度もない。

抵抗すればするほど、瞼が強制的に閉まつて、起きているか、眠つているかわからない状態を何往復もして、僕は結局、体が重たくなつて、頭が軽くなる方一つまり、眠ること一を選んでしまう。後のことなど考えずにな。

その後のことは、成り行きに任せるとしかいよ、うん。

ほんと、成り行きつてこんなもんだよね。

少なくとも、僕にとってはそんな感じ。

ああ、考えるのもできなくなつてきた。

眠い、ね…………ぐう。

目が覚めたのは、どのくらい経つてからだろ？  
すごく短い間だつて気がするけど、人の感覚なんて、曖昧だよね。  
ホンの十分、寝てたつもりなのに、実際には一時間も寝てた、なんてよくある話。

少なくとも、タオルを透過する光から、まだまだ日差しは強いみたいだから、僕が寝てたのは、すごく短い間だつて判断できる。  
いや、もしかしたら、一日中寝てて、次の日になつてるって可能性はあるかも。

そうだったら、すごくラッキイ。

すごく面白い。

だつて、こんな野つ原で無防備に寝ててさ、虫に食われてもいいな  
ければ、吸血鬼に食べられてもいいんだもの。

僕はわくわくして顔に乗つけてたタオルを取つて、起き上がる。  
タオルをウェストポーチに直しながら、ゴーグルを装着。  
ちょうど、熊のぬいぐるみのような座り方でゴーグルに表示される日時を確認。

あ、残念。

僕が居眠りしてから四十分が経過したくらいだった。

ううん、ガヴィールたちが来るまで、あと十分足らずつてとこかな。

岩の上で立ち上がり、大きく欠伸。

ついでに腕を伸ばしてストレッチ。

関節が小気味良く鳴つて、ふう、すつきり。

ガヴィールたちがやってくるであろう方角を片手を額に翳して窺う。

お、あれかな？

今僕のいる岩石郡の途切れた場所から結構遠くに、一いちらへ向か

つているメタリックな光を時おり放つ、黒点が一つ。  
僕は笑顔で片手を腰に当て、もう片方はブンブンとそちらへ向か  
つて回した。

そんなことしても、相手が気付くはずがない？

あっちが気付くかどうかはどうでも良くて、要は僕の気分の問題。  
満足の仁王立ち。

「お目覚めですか？」

ぴたり。

僕の動きは止まる。

そろり。

僕は背後を窺う。

どきり。

僕の心臓が大きく鼓動する。

よろり。

僕は思わず後退る。

くらり。

僕は僅かに、眩暈。

僕の後ろに、吸血鬼が一人、立っていた。

起き抜けの僕に、話しかけてきたのはコイツ。

馬鹿な。

それが心の第一声。

だつて、ゴーグルが、反応していない。

これが心の第二声。

僕はゴーグルが、どういった仕組みで吸血鬼の位置を判別しているのか知らないけれど、そのセンサが当たらない事は、少なくとも、今を除いてなかつた。

しかも、一昨日メンテナンスしてもらつたばかり。

壊れた、という事じゃないと思う、たぶん。

しかし、僕つてなんなのかな？

頭の中は、何からしていいかわからないくらいパニックなのに、体はまるで、別の冷静な脳から信号を受け取つてゐみたい。こんな状況でも、予めプログラムされた機械の様に、体が自動で動くんだ。

つい、五十分前と同じ行動。

いや、さつきよりもずっと素早くゴーグルを戦闘モードに切り替えて、レーザ・サーベルを構える。

「お待ちください。私は、あなた様と争う気はございません」

吸血鬼　オスだ　　が、両手を軽く肩の高さに挙げてまた、話す。

人間で言つたら、敵意はない、というポーズだが、吸血鬼にどうしてはどうなんだろうか？

わからないながら、僕は驚いていた。

ゴーグルに感知できない吸血鬼、っていう事にだけじゃない。

これほど物腰の柔らかな態度の吸血鬼は、僕は一人しか知らない。

養母くらいしか、こんな喋り方をする吸血鬼を知らない。

養母以外の吸血鬼なんて、言葉を理解できるし、話す事も出来るけど、言つてる事が支離滅裂で、無駄に唸つてる事だけが多い。

「こいつは、一体なんだ？」

他の吸血鬼とは別の意味で、不気味だ。

僕は争つつもりはない、とか言われても、明らかに怪しいヤツをあつさり信用するほどお出度い頭はしていないつもり。

じりじりと剣を構えたまま、後退り。

相手は信用してもらえないこの状況に困つた、とでも言ひたげに頬を搔く。

それが、余裕を見せているように思えて、緊張する。

「いつからだ？」

僕は慎重に訊ねた。

「あなたがお仲間の死体の破片を集めている時から

普通なら何が?とか聞きそうなものを、こいつはあつさりと答えた。

「勘がいいのか、察しがいいというか、頭の回転が速いというか。

「私はあなた様にお伝えする事があつて、参りました」

僕が問いただす前に相手は話を続ける。

「でなければ、あなた様にこうして話しかけたりなどしません。

私には、あなた様の首をへし折る時間も、五体をバラバラに引き裂く時間も十分にあつたのですから」

これには、認めない訳にはいかなかつた。

こいつの言つ事が本当にしろ噓にしろ、いずれにしても、僕は話しつけられるまでコイツに気付かなかつたのだから。

けれど、だからって刀を納める気にはならない。

僕は相手の出方を待ちながら、じつと相手を見据える。

相手は仕方がない、と思つたのか構わず続ける。

「まずは、私の同志を使ってあなた様の力量を測らせて頂いた事をお詫びいたします。

手荒ではありましたが、私にはこうするしか確かめる術がなかつたのです。

ですが、それで私は確信いたしました。

ナクタルシータ様、ですね？」

言葉こそ疑問形だが、確固たる根拠を持つた、確認だつた。  
「こんな事を吸血鬼に求めるのは馬鹿馬鹿しいが、もしお前が人間社会で言う礼儀というものを知つてお前が名乗るべきなんじゃないのか？」

僕は答えず、暫く沈黙した後、漸くそれを言った。

大丈夫、僕はまだ緊張はしてるけど、動搖はしていない。  
どうして僕の名前を知つているのかわからぬけれど、こんな奇妙な登場をしたヤツなら知つてもおかしくない、と無理な事を思つて自分に言い聞かす。

「これは、失礼しました。

そうですね、うつかり失念しておりました。

私の名は、クバチ、と申します。

以後、お見知りおきを、ナクタルシータ様  
わざとらしく目を見開いたあと、優雅にクバチは腰を折つてお辞儀する。

その隙に僕は岩を飛び降りて、さつきガヴィールたちが見えた方向に走り出した。

ジャンプ・ブーツを使って岩を飛び越え、走り、一直線に。

今日は使いすぎて膝が痛かつたけれど、あんな不気味なヤツから逃げきるには仕方ない。

非常事態つてヤツ。

バイバイ。

「お待ちください！」

私はあなた様にお伝えする事があるのです！」

逃げだした僕に向かつて、背中でクバチが叫んでるけど、僕は振り返りもせずに走り続ける。

ガヴァイールたちはまだ見えない。

「お待ちください。どうか、私の話を聞いてください」

すぐ横に、クバチが来ていた。

僕はぎょっとし、ソイツに向かつて、未だ鞄に納めていないレザ・サーベルを横に振る。

軽くうわ、とか言いながら、ひょいとクバチは避けて、視界にいなくなる。

またクバチが横に追いつく。

それを何回か繰り返しながら、僕は内心驚いていた。

コイツの足の速さは尋常じゃない。

いくら吸血鬼だといっても、群を抜いている。

まるで、<sup>はは</sup>養母と同じだ。

ホンとに、一体何者なんだろう？

岩石郡が途切れ、見通しの良い場所に出ると、ガヴァイールたちがぽんやり確認できた。

よかつた。

バイクに乗れば、振り切れる。

またクバチが横に並んだ。

もうこの時には、その顔は最初に見たときと違つて、明らかに苛付いて優雅さの欠片さえ見えなくなつていた。

まさに、羊の皮をかぶつた狼が本性を表したつて感じだ。

「いい加減にしてもらえませんか。

追いかけっこをしに私はあなた様に会いに来た訳ではありません

さつきと変わらない丁寧さだが、吐き捨てるような言い方だった。

「誰が、お前の話を聞いてやるって言つた？」

僕は全く聞く気が無かったから、平然と答える。

どうやらこれには腹が立つたらしい。

牙を剥いて本格的に襲い掛かってきた。

うわお、怖い顔。

やっぱり、吸血鬼は吸血鬼って事かなあ？

こんな事くらいであつさり襲い掛かってくるなんて。

人間が出来てない証拠だよ、うん。

あ、人間じゃなかつたか。

僕は横に跳んでクバチの第一撃を避けた。

メタリックな影がどんどん近づいてくるのを横目で確認する。

余所見中にクバチが迫る。

あつぶないなあ。

ゴーグルは想定外の速さのクバチを捕捉できず、自分の目で確かめるしかなかつた。

ちなみに、僕は視力がそんなにいい訳ではないけれど、動体視力には自信がある。

左手で相手の突き出した拳を受け流してそのまま片手で投げる。クバチはひらりと猫のように回転し、着地。

ヤツは身軽でもあるようだ。

僕は素早くジャンプして距離をとる。

すぐに立ち上がってクバチは迫る。

レーザ・サーベルがクバチの体に一線を描く。

そう思つた時にはクバチはおらず、横から長い爪が襲う。

さつきも確認したように、クバチは素早い。

僕はギリギリをジャンプ・ブーストで避けるしかない。

自分の反射神経の良さに感謝。

何度もとなく、ぎりぎりの攻防を繰り返す内、膝が譲々と震えだし

た。

チクショウ、限界だ。

何とか、ガヴィールたちが来るまで、持ち堪えなきや。

どうする？ どうする？ どうする？ どうする？ どうする？

僕の頭の中で色々な候補が上がり、すぐに消える。

それでも、まだ僕は心の中で楽しんでいるのを感じている。

また、クバチが僕に迫る。

僕はバランスを崩して地面に手を着く。

さらに具合の悪いことに、レーザ・サーベルが光を失いつつもあつた。

バッテリィが切れ掛かっているのだ。

充電したのはいつ以来だつけ？

3ヶ月前にガヴィーに充電しろって言われたけどやらなかつた記憶が微かにある。

やつちやつたなあ、少しばガヴィーの言う事聞けばよかつた。

そんな事を思うのは、まだまだ余裕の証拠、と僕は自分に言い聞かせる。

嫌な汗が顔を伝つ。

僕は相手を睨みすえたまま、地面に膝を付いて喘いだ。

殺されるかな、と思つたが、予想外にも、素早く迫つてきたクバチが僕のすぐ目の前で止まつた。

「お疲れですか？」

こう言つては失礼ですが、自業自得です。

私は、あなた様に危害を加える気はないと申し上げました。

私は、あなた様にお伝えする事を伝えたら、このままお暇する事を約束します。

ですから、私の話を聞いてください」

大きく息をしながら、怒つた口調でクバチが言つ。

吸血鬼の言う事をまともに聞いて助かつたなんて話は聞いたことがないし、初めて会つた人間 「コイツは吸血鬼だけど」 を信用しろ、つていうのもおかしな話だろ。

僕はその言い草にムカついたけど、顔には出さず、言つた。

「話せ」

「あなた様に会いたい、と仰られる方から私は派遣されました。もし、あなた様がそれに応じるのなら、三日後にまた、先ほどあなた様が寝ていた岩の上に私が迎えに参つておりますので、よろしくればおいで下さい。以上です」

クバチは無理矢理貼り付けたような笑顔を僕に向けた。

なんだそりや？ というのが率直な感想。

「誰だ、ソイツは」

とりあえず気になつたことを確認した。

「それを今、申し上げる事は出来ません  
ふざけんな。

「それで、お前の言うナクタルシータ、といつヤツが応じると思つのか？」

「あなた様が、ナクタルシータ様です」

きつぱりとクバチは言つ。

「僕が、お前に名乗つたか？」

「いいえ。ですが、私があな様をナクタルシータ様だと判断したので、あなた様に申し上げました」「じゃあ、僕が、もしそのナクタルシータだとしたら、答えは一つ。断る。

お前らこのこに付いて行つて、何かメリットがある訳でもない。食べられるのがオチだ」

僕にはそれが、比較的に頭脳が発達した吸血鬼による、新しい狩猟方法だと判断した。

まだまだ、頭の悪いやり方ではあるけれど。

「まさか。

あなた様を食べる吸血鬼など、この世にいる訳がありません。危害を加える事も、ありません」

わざとらしい驚いた顔で左右に首を振るクバチ。

その言葉に、僕は大笑いした。

「何か、おかしな事でも言いましたでしょうか？」

突然笑い出した僕を見て、戸惑うようにクバチが首を傾げる。

それはそれは、ありがたい事だなあ。

全く、そんな事で相手が乗り気になるとでも思つのだろ？

僕はくだらない嘘をつくものだ、と思つた。

ならば、僕の左腕はどう説明する？、と言つてやりたくなつたが、笑いをおさめ、他の事を口にする。

「お前の言葉だけで信用する人間がいたら、見てみたいよ」

僕は不思議そうな顔を向けるクバチを見やりつつ、笑いを噛み殺す。

面倒なことをせずに、さっさと止めをさして、そいつのところに僕を連れていつた方が早いといふのに、それをしないクバチの頭の悪さを心の中で笑う。

「…ですか。ええ、そうですね」

そう言つてクバチは腕を組んで眉根を寄せる。

その仕草は最初に見た時のよつた、なんとも優雅なものだつた。  
「では、こうしましょう。

三日後、お迎えの際にカルネアを連れて参ります

「カルネアを連れて参ります」

クバチがそう言つた瞬間、銃声が辺りに響いた。

弾が、クバチの足元の地面にめり込んだ跡を残す。

クバチは素早く飛び退つてもう目の前にはいなかつた。

「デューター副隊長！」

声の方に目を向けると、中年男性 ガヴィールが手放しでバイクに乗り、銃を構えてかなり近い所まで来ていた。

その乗り方、危ないからやるなつていつも僕に言つてゐるのに、自分はやるんだ、ガヴィー…。

それからちよつと遅れた所に、やつぱり銃を構えた青年 こち

らは片手だが ザグラスの姿がある。

「どうやら、お迎えが来たようですね。

では、三日後に

少し離れた場所からそつと言つてクバチはガヴィーとザックの銃弾の中を、恐るべき足の速さであつといつ間に走り去つた。

「待て！」

僕は思わず叫んだ。

けれど、それで待つ訳がない。

僕がさつき証明済みだ。

「無事ですか？」

いつの間にか、ザグラスが膝を付いて僕を覗き込んでいた。

「顔色が悪いですよ」

クバチに顔色が変わつたのを見られただろうか？

いや、ゴーグルで顔半分は隠れてたから、わかつてはいないだろう。たぶん。

「大丈夫だよ。少し、疲れただけ」

僕はゴーグルを首に提げてから、首を左右に振つた。

クバチを追つたガヴィールもすぐに戻ってきた。  
こんな時に深追いするのは上策じゃない。

いい判断だ。あとで褒めてあげよう。

「どこも、齧られたりしてませんね？」

「ゴーグルを外して近づいてきたガヴィールの方が、襲われたんじゃ  
なかろうか、と思うくらいに顔が真っ青になっていた。

「大丈夫。来てくれて、ありがとう。

ブーツの使いすぎで足がダメになつてたんだ。  
もうちょっとで、殺されてた」

僕は思い出したように相棒の柄を元に戻しながら、無理に笑つた。  
「今のヤツが、応援を呼んで来るとも限りません。

すぐに帰りましょう

周りをゴーグルで確認しつつ、ザグラスが言つ。  
よかつた。ガヴィーたちはクバチの話が聞こえなかつたみたいだ。  
ガヴィーが立てない僕を抱きかかえてくれた。  
そして自分のバイクに乗せてくれる。

一台のバイクが軽いエンジン音を立ててからすべらかに発進する。  
僕は、ガヴィーの背中に掴まりつつ、クバチの消えた方向を振り  
返つた。

カルネア 養母<sup>はは</sup>が、生きている？

養母の名前だけで、僕は頭がガンガンする位、動搖していた。

## 9（後書き）

声だけの登場人物がやっと姿を出しました。

そこには、「じちや」「じちや」と僕には良くわからない機械が雑然と並んでいた。

でつかい洗濯機みたいなものや、太いパイプで壁に繋がっているガラスケース、冷蔵庫っぽいものには計器類がついていて、他にもいくつかのランプのついた箱や、これまたごちやごちやとケーブルとかがぼさぼさの髪のようにくつついたものとか他にも色々。

いや、雑然、と言うのは間違いかもしれない。

機械にはそれぞれの役割があつて、それをスムーズ、かつ有効に使えるような配置にしてあるのだ、ヒジエガンが以前ふんぞり返つて言つていたから、それなりの理由があつてそういうた並びにしてある、ヒジエガンの面目のためにも言つたほうがいいのだろう。

棚にはガラスでできた様々な形の器や管、小さなプラスチック製の変な形の容器がいっぱい詰まつたビンとか、液体の入つたビンとかが、こちらは以外にもきちんと分けられて整理されている事からも、ある意味説得力があると僕は思つてゐる。

そんな部屋をガラス越しに見ながら、僕は上半身を軽く起こす姿勢になるベッドに寝ていた。

こちらも、いくつかの計器類が置かれているが、部屋がこちらの方が広いせいか、向こうに比べれば整然としていた。

僕は、今は戦闘服を脱いでタンクトップに短いスパッツといった軽装をしている。

横においてある台の上に投げ出した左腕は人工皮膚を完全に剥がした状態だった。

今その左腕は、何本ものいろんな色のケーブルで一・二の計器に繋がれている。

その台の横、僕の左側には丸メガネをかけたもうすぐ老人と言われる年齢に差掛かるであろう、そんな見た目の老人一結局老人つて

いつちやつたよーが計器類を見ながら椅子に座つてそれはそれは渋い顔をしている。

「ふむ、洗浄は終わつたし、特に異常もないな」

計器のモニタ眺めて、ほつとしたのか溜息交じりの口調で眉間に寄つていた皺を緩めた。

「よかつた。ついつかり、つてヤツだね。どうなる事かと思つたけど」

僕はにこやかに言つた。

「バカたれ。何がうつかりだ。よく氣をつけろとこの前言つたばかりだらうが」

立ち上がりついでにペーん、と額を叩かれた。

結構、痛い。

うーん、頭痛がするのに容赦のないじじいめ。

「そうですねえ、戦闘服なんだから転がつても痛くないでしきう。そのまま転がればいいでしきう」

今は白衣を着て、計器に出たデータを記録装置に打ち込みながら、こちらを見もせずにザグラスが老人に同意する。

「そとは言つてもねえ、ザック。

人の条件反射というものは、意識しても逆らえないものがあると思わないかい？」

「同意しかねますね。私は、副隊長のような悪趣味な戦闘服を着ていませんので。

それに、手首を捻るからやつません」

ああ、そうかい。

僕が悪いって事かい。

悪趣味つて言つても肘から下の腕を剥き出しにしてるだけだらうが。

隊に支給される戦闘服は、普通は手首まで覆われるもので、手にもナイフが突き刺さらず、通気性が良い、といった特性を持つ特殊布でできた手袋を着用するので、ザグラスはそう言つたのだった。

ちなみに、僕は手袋もしない。

「そもそも、僕の場合、痛覚がないって事が問題なんだよ、うん。痛くないから、どうなっても僕に自覚がないから、ついやつちやうんだよ」

僕はちょっと悔しくて言い返してみた。

「だから、他の兵士と同じように戦闘服を着たらいんじやないですか？」

痛みがないってのは同じなんですから」

ザグラスは相変わらず記憶装置に向かいながら、平然と答える。まあね、そういう切り返しがくるとわかつてたよ。だけどさ、そんな嫌味言わずにわあ、もうちょっとなんかないかなあ？

そうへらへらと笑いながら痛いトコ突くのって、性格悪いと思つよ、僕は。

「ところでザック、ガヴィーはどうしたの？」

僕は話題を変えることにした。

「ガヴィーはパートナの所だろうよ。誰かさんのおかげで、名誉回復に勤しんでるんだろ」

ザックとの会話の途中、席を離れた老人が、よつこいしょ、と僕の横の椅子にまた座りながらザックの代わりに答える。

その掛け声、爺くさいよ。

老人は手に不透明なプラスティック製の箱を持つていて、それを僕の左腕を乗せた台の隅に置く。

「ジェガン、嫌味はもう少しオブラーントに包んでくれないかな？」

「お前さんの反省がちいとも見えんのにな」

フンッと鼻息を一つしてジェガンは言つ。

嫌だねえ。

ちょっと脱走しただけなのに、大の大人が揃いも揃つてこんな風に責めるなんて。

僕だつて凹むんだよ？お手柔らかに願いたいねえ。

ジェガンは箱の中から人工皮膚を取り出して、僕の左腕に貼り付け始める。

「大体な、お前さんは自覚が足らんだ。自覚が。

お前さんはな、ここ副隊長だぞ？

そりやあ、まだ子供だから、つて事で多少の事にはわしゃ目を瞑るが、そんなお前の下に就く者はどうなる？

これからお前のために命を落とさにゃならん奴らがいるかもしけん。

なのに、その理由がお前が脱走したのを追いかけてその途中で吸血鬼に襲われて死にました、なんて事を遺族の者たちに言つつもりか？

誰だつてな、兵役などに就きたくはないんだよ。特に、ルテイルに生まれた者はな。

永緑壁の中にいれば、安全に暮らせるからな。

だがな、それでは国は立ち行かん理由がある事は、お前も知つての通りだ。

仕方なく、やつてる事なんだ。

嫌々やつてる者をまとめるわし達上部の人間は、そいつらの命を預かってる事を自覚して、責任を負わねばならん。

わかるか？ ダイル。」

無骨な、節くれ立つた手が意外にも器用に皮膚を貼り付けていく

その手つきを見つめながら、僕はジエガンの話を聞いていた。

僕だつて、知つてはいるんだ、そんな事。

自覚が無いっていうのも、そうなんだと思う。

だつて、本当に実感がないんだもの。

副隊長なんて役職に就いて既に四ヶ月。

実際の仕事、特に「デスクワークなんて、補佐役のガヴィーとザックがやつてるもんだから、僕にはする事がない。

僕が働く場所は、永緑壁の外しかない。

僕は、他の隊 もしかしたらこの隊の構成員もかもしれないけど が、僕を何て呼んでいるのか知つていて。

“第三部隊の戦闘人形・ダイル” “デューター”

そう呼ばれている。

当たつてはいるかどうかは、僕には判断がつかない。

少なくとも、僕は、吸血鬼を追い払う事しか能のない人間なんだとは思う。

それに不満を持った事もないし、吸血鬼を殺す事に躊躇した事などは無い。

ただ、僕はそれを僕の仕事だと思って、実行しているだけ。

副隊長なんて役職に就く」と自体が間違っている、と僕は思つて  
いる。

部下なんて、本当は要らない。

下つ端で、自由にやつててる方が、僕には向いてると想つ。

なんでジエガンは僕を副隊長なんかにしたんだろう?

親バカも常軌を逸してると言つててるのに。

僕がぼんやり思考していると、田の前にぬつとかさかさの乾いた手が僕の視界を覆つた。

「二、三度ゆつくり瞬きをすると、

「真面目な話をしとるつちゅうのに、聞かんか、クソガキ。

しまいにやケツ叩くぞ」

両頬をむにいとつまれる。

ええい、僕の思考の邪魔をするなんて、なんてヒドイジジいだろ  
う。

でも僕はこいつ見えても親孝行だからね、恨みがましい田で見つめ  
るだけで手を打とうじゃないか。

「デューター隊長、ガヴィールさんが来たみたいです」

記憶装置の横のモニタを眺めてザックが言つ。

僕らのやり取りを聞いていなかつたかのよづな、のんびりとした  
口調だ。

「ん? そうか。悪いがワシは手が空かんのでな、お前さん開けてや  
つてくれ」

再び作業に集中しつつ、ジエガンは答える。

言われたザグラスは立ち上がりつてドアの横にあるいくつかのボタ  
ンを操作する。

この研究室は、部屋の主であるジエガンとその助手であるザグラ  
ス以外はドアをあけることができない仕組みになっている。

僕やガヴィーだつて結構頻繁に出入りするのに、鍵である指紋認  
証盤には僕らの指紋は登録されていないんだ。

研究内容の流出を防ぐためとか何とからしい。

面倒くさいよね。

音も立てずにドアはゆっくりと左右にスライドして開いた。

「失礼します、デューク・デューク・デューク・ルテイル国第三部隊副隊長補佐官、ガヴィール＝ベイト入ります」  
ガヴィールはきつちり隊規を守つて入つてくる。  
挨拶なんて下がいんだから、適當でいいのに。  
律儀なヤツだ。

「僕もいますよ、ガヴィールさん」

ドアの横の壁に肩肘を付いて体を預けた姿勢で二コ二コとザグラスは言った。

そちらにちらりと目を向けて、

「ちょうどよかつた。お前にも聞いてもらいたい」

そう言って、ガヴィールはジェガンが手招きしたのを確認して入つて来る。

丁度目があつたので、ザグラスに僕が“？”の視線を投げかけると、彼は肩を竦めてわからない、といったジェスチャで応えた。

「そこに掛けているといい」

僕の左手に集中しているせいが、ジエガンの示した指は椅子からちょっと外れた所を指していたが、それを指摘する者はいなかつた。ガヴィールは言われたとおり、僕が乗つているベッドを挟んでジエガンと向かい合う位置の椅子に腰掛けた。

ザグラスも自分の作業をしていた場所に戻つたが、続きをする事なく僕たちの方を向いてガヴィーの話を待つている。

ドアは既に、やはり音も無くスライドして閉まつていた。

「まず、私の話を始める前に、副隊長に一・二質問があります」

僕をガヴィーはじつと見た。

どこか緊張した、真剣な顔つきだ。

僕は軽く頷いて話を促した。

「今日私達が副隊長を迎えていた時、副隊長と戦つていた吸血鬼についてです。

副隊長は、あの吸血鬼を知つていたのですか？」

僕は意味を図りかねた。

「知り合いか、という意味？」

僕が聞くと、ガヴィールは頷くだけで肯定を示す。

「知らないよ。初めて会つたヤツだ」

「では、ヤツに副隊長は手傷を負わせましたか？」

「いいや。とても素早いヤツで、軽い傷くらいは付けたけど、完璧に捉えることはできなかつた。ガヴィーたちが来た時点で、殆どの傷は治つてたはずだ」

僕は、忌々しく下唇を噛んだ。本当に、悔しかつたからだ。

それを認めるに、ガヴィールは今度は視線をジエガンに向き直した。

「私達が、隠れながらではありますが、副隊長の姿を確認した時、

副隊長は膝を付いて吸血鬼と対峙している状態でした。

普通なら、吸血鬼は倒れた瞬間に上に圧し掛かって首を折るなり、喉に噛み付くなり、襲い掛かってきます。

しかし、遠目ですが、ヤツは膝を付いた副隊長を眺めているだけに見えました。

あの時は、副隊長が襲われていると思って、何も考えませんでし  
たが、後になって思えば、吸血鬼としては異常な行動だと思われま  
す。

そこで、私が考えた理由が二つあります。

一つは、その吸血鬼も動けない状態だった。

しかし、これは私とザグラスが駆けつけた時のヤツの動きと、副  
隊長の話を考慮すれば、あり得ない事です。

もう一つは、気に入らない事ですが、吸血鬼は副隊長になんらか  
の躊躇する要素があつた、という事です

僕は鼻に皺を作つて不愉快、という事を示すが、ガヴィーはジエ  
ガンを真っ直ぐに見ていて気付いてはくれなかつた。

「しかし、躊躇したのなら、その前になぜ、副隊長が立てない状態  
になるほど逃げていたのか、説明できませんよ」

話をよく聞こうと思つたからか、ガヴィーの横に椅子を持つて來  
ながら、ザグラスが口を挟んだ。

「それがわからんから、副隊長に聞いてるんだ」

ガヴィールは予期していたのか、何の事はない、という風に横に  
来た同僚に言つた。

「いやいや、仮にそいつが副隊長に対しても躊躇したのだとして、  
相手は吸血鬼ですよ？」

獲物に対しても子供だからと手心でも加えたと？」

「俺は吸血鬼の行動基準なんか知らんから、副隊長に聞いたんだろ

う

そうして僕の直属の部下一人はほぼ同時に僕に視線を向けた。  
どちらの瞳も、どうなんだ?と言つてはいると僕は理解した。

そうして僕の直属の部下一人はほぼ同時に僕に視線を向けた。

どちらの瞳も、どうなんだ?と言つてはいると僕は理解した。

仲の良い事だ。

向けられた2対の瞳に、僕は溜息をつきたくなった。

僕の過去からすると、仕方がないから、実際に溜息をつこうとは思わないが。

「あのさ、そんな期待の目を向けられてこそ、僕にだって、わからぬいよ。

確かに、僕は壁外の人間で、吸血鬼を身近に育つたよ。

それは認める。

けどさ、僕と接触していたのはたった一人だよ？  
たつた一例で、どんな評価ができるというのさ？」

僕はやれやれ、という様に首を左右に振りながら苦々しい顔を作  
る。

「その接触していた一人なのでは？」

まだ真剣な眼差しをガヴィールは僕に向けている。  
ああ、これは参った。どうやら、僕は疑われているらしい。

正確には、僕ら、かもしだれない。

その疑いが何に対してだかは、不確定だが、まあ、想像の範囲内  
の事だろう。

僕は今度こそ溜息をついて、ガヴィーを真っ直ぐに見た。

「ありえない。僕がその人を間違えるはずがない」

そもそも性別が違う、とは言わなかつた。

僕がきつぱりと断言すると、ガヴィールはほつとしたような、ま  
だ納得してないような、変な表情になつた。

「残念。ガヴィールさんの予想は全部ハズレでしたね  
あつけらかんとザグラスが言つた。

そのあまりにも楽観的な態度に、じろりとガヴィールは彼を睨む。

「それで？」

今まで作業をしながらずっと黙つたままだったジェガンが口を開

いた。

「は…。それで、とは？」

一瞬、戸惑うように視線を彷徨わせてガヴィールは聞き返す。  
「だから、それで、その吸血鬼の行動の異常さにどんな問題があるのか、と聞いとるんだ」

「それは、その…」

「その、ではなかろうが。

吸血鬼の行動パターンをワシリラは全て把握しどける訳じゃない。  
むしろわからん事ずくめといってよからう。

吸血鬼として、今のところそれが異常な行動というの納得できる。

しかし、例外的にこんな行動をする吸血鬼がいた、それは何の為か、どうする気か、その行動にどんな問題があるか、どんな被害に遭うのか、どう対抗すればよいか、これを考えなければなるまい。

ただ、こんな行動をする吸血鬼がいた、それは何の為か。  
それだけしかしないのならば、何の役にもたたんだろう」

静かに、作業を続けながらジェガンは言った。

ガヴィールは押し黙り、室内に重たい空気が流れる。  
ジェガンは、疑われているらしい僕を弁護している。  
僕が疑われる事に怒っている。

そう思つた。

親バカだ。

間違いなく、底抜けの親バカだ。

いや、バカ親といった方が正しいのかな？

とにかく、公私混同もいいところだ。

ありがたいけれど、それこそ部下に示しが付かないのではないか、  
と僕は焦る。

「あの、さ。ジェガン、ガヴィールが僕を疑うのは仕方ないよ」

僕は、俯いておずおずと言つてみた。

皆の視線が僕に集まる。

「ハハ、懐持つてねえ。皿を出さんへこじやなこが。

「ガヴィールの言つてる事に、少しは納得できるもの」  
僕は降参、とでも言つようく軽く両手を上げようとしたが、左腕はまだ全ての皮膚を貼り終えていなかつたので上げるのは憚られて、右手だけの微妙なポーズになってしまった。

「その根拠は？」

ジエガンが最後のパーツを貼り付けながら聞いた。

「うん、僕はあの吸血鬼の事を知らなかつたけれど、アイツは僕の事を知つていたっぽいって事」

説明するのが何だかむず痒くなつて、右手で首の後ろ辺りをガリガリ搔いた。

「知つていたっぽいとは？」

今度はザグラスが聞いた。

「僕にもよくわからない」

アイツは、僕の事をナクタルシータだらうつて聞いてきた。

何のことかわからなかつたから、僕は否定した。

けどね、ヤツは確認つていうよりむしろ、指摘に近い態度だったよ。

よ。

自分が僕をナクタルシータと判断したから、僕がナクタルシータだつて言つてた。

どうも、ナクタルシータつて奴の顔自体を知つていてる風ではなかつたけどね。

他の何かの要因で区別したみたいだ。

ねえ、ガヴィール、もし君が吸血鬼にお前はガヴィール＝ベイトだなつていきなり話しかけられたらどう思つ？

僕は首を傾げて片方だけ口元を上げる。

「そう…ですな。氣味が悪い、とでも言いましょうか。何ともいえない不安感を覚えます。

多分、動搖することでしょう。

そして何故、吸血鬼に名前を知られているのか、気になります。もし、問い合わせ事ができる状況、周りに他の吸血鬼がおらず、また他の吸血鬼が来ないとわかっている上で、相手が喋る事には差支えが無く、こちらに危害を加えない状況とでも言いましょうか、そのようなこちらが圧倒的に有利かつ危険のない状況下であれば、納得のいくまで尋問しようと思います」

額の剃り残した髪が気になるのだろうか、手で擦りつつガヴィールは考え考え答える。

「ザグラスは？」

ザグラスにも同様の笑みを見せて僕は聞く。

「僕ですか？」

「うーん、そうですねえ…まあ、氣味が悪いって言つのは同じ意見ですね。

けれど、ガヴィールさんの言つような、そんな状況なんて滅多に…いいえ、全くないと言つた方が正しいと思います。

ですから、私の意見としては、その吸血鬼に田の前から消えてもらおう、ですね。

これは、殺すという事だけが当てはまる訳ではありません。

勿論、殺してしまえば私を私と認識して襲つてくる吸血鬼がいなくなる、とは言い切れませんが、とりあえず、今その時の不安を払拭できるでしょう。

ですが、確実に殺せる技量が私にあるかどうかは、その個体や状況によつて変わります。

もし私にソイツを殺せるほどの技量がない場合、私がソイツの田の前からいなくなれば、これは田の前から消える、という意味では有効な手段かと。

要するに、この場合、逃げる、といつのが一番有効だと思われます。

一応言つておきますけど、逃げ切れるかどうかは別問題ですよ？

「この場合、不安感も、疑問も解決する事はありませんが、一時的な身の安全は守る事ができます」

につっこりとザグラスは僕に笑いかけた。

「僕は、ザグラスの言った事と一緒に逃げるのを選んだ。

僕がザグラスの意見と違う所は、相手を倒せるだけの技量があるかどうかなんて事は考えずに逃げたって事かな。

どうしてだと思う？」

僕はジェガンを見た。

作業を終えたジェガンは僕が左腕を置いていた台に肩肘を付いて、足を組んで聞いていた。

僕がジェガンの答えを待つ間、左腕の調子を試す為に拳を握つたり開いたりした。

うん、いい感じだ。

「それで？」

僕の言った事を無視してジェガンが言った。

「それで、その他にはそいつは何を言ったんだ？」

その吸血鬼がお前の事を知つていた上で殺そうとしていたのなら、お前が立てない時点で殺されただろう。

ところがどっこい、お前さんは生きとる。

別の目的があつたから殺されなかつた、と判断できる。

まあ、じつくり眺めた上で斬り殺そうとしたのかも知れんが。

だが、別の目的でそういう行動をしたとして、吸血鬼が、食料として殺す以外の目的で人間と関わるとする目的とは？

はて、一体何だろうか、のぉ？」

僕をジェガンは見据えている。

僕はゆっくり瞬いて彼を見つめ返す。

ジェガンは目を逸らさない。

## 15（前書き）

途中、視点が主人公から第三者に変わります。

先に視線をそらしたのは僕だった。

「部屋に戻る。ザグラス、連れて行つて」

僕はザグラスを睨んだ。

僕はやはり膝を痛めていて、あまり歩けない状態なのだった。

「ええ、わかりました」

そう言つてザグラスは端に置いてあつた車椅子を持つてくる。ジエガンも、ガヴィールも何も言わない。

止めることもしない。

これ以上僕が何も話さないことが分かつてゐるからだろ?。持つてきた車椅子が不満で、僕は言った。

「違う。君が、僕を抱えていくんだ」

「はい」

ザグラスは逆らわない。

僕はザグラスに抱えてもらつて部屋を出た。

「やはり、あのくひいの小手先の芝居じや引っかかりませんでしたな」

ダイルとザグラスが出て行つて暫くしての事。

ガヴィールは腕を組んで盛大に溜息をついた。

ジエガンは人工皮膚の入つていたケースを片付けている。

「いや、最初は引っかかつていた。

無意識だろうが、重要な情報を自ら話してあるし、そうしてしまつたことには気付いてもおらんだろう。

ただ、途中でワシらが何か知つてゐることは気付いたみたいだな。

最後の、ワシの言い方が不味かつたのかもしけん。

しかしなあ。全く、勘のいい、喰えないガキに育つたもんだ」

ひょつひょつひょ、と言葉とは裏腹に楽しんでるよつて。『ジエガン』は笑った。

「御自分の子供の評価とは思えない言葉ですね」

苦笑いでガヴィールは返した。

「ところで、ダイルの持つて帰つてきた“被害者たち”は遺族のもとに送るよう、手配したか?」

ガヴィールに向き直つたジエガンは、眞面目な顔に既に切り替わつていた。

ガヴィールは再び短く溜息を付く。

「ええ、帰つてきつてすぐに副隊長に命じられましたので、遺族が判明したものから順に、送り届けています」

「そうか」

ジエガンも、複雑な様子だ。

ダイルは、吸血鬼の襲撃を聞く度、ルテイル国から脱走する。それは、被害者を遺族に送り届けるためだ。

少なくとも、一部でも。

ダイルは問題児だが、それはダイルの優しさによるものだと、大人们たちは理解している。

しかし、それは遺族に、被害者の死を嫌でもつきつけることである。

ダイルの行為は、紙一重。

感謝する者もいれば、生きているかもしれないといつ希望を打ち砕かれ、暴言を吐く者もいる。

だからジエガン達は、それを褒めることも、責めることもできない。

脱走する』とは別として。

「それより、隊長。あの吸血鬼の対応はどうするんです?」

「まずは、ダイルのゴーグルを調べるしかなからう。」

それと、お前さんたちのも。

そのあとにあの映像は即刻破棄しなければな  
「そうですよね。まあ、田下の問題は…」

「ザグラスじゃな」

ガヴィールの言葉を取つて、ジェガンはモニタを操作した。

それはガヴィールの意図する言葉ではなかつたが、ジェガンの視

線の先を見てそれもそうだ、とでもいう風に頷いた。

それは廊下をゆっくり歩くザグラスと、彼に抱えられて出て行く

ダイルの映像記録だつた。

そのダイルは、ザグラスの背中に回した手を、こちらに向かつて中指を立てて睨みつけていた。

「着きました

僕の部屋のドアの前でザグラスは止まつた。

僕は無言で抱きかかえられたままドアの横のボタンをいくつか押し、その上に取り付けてある指紋照合盤に乱暴に手を押し付けた。

「壊れますよ？」

ザグラスが注意する。

僕は、無視。

照合版の中の左右に伸びた光のラインが一本、上下に一往復し、電子音が鳴つた。

ドアが右にスライドして開く。

僕を抱きかかえたザグラスはゆっくりと部屋に入る。

「相変わらず、掃除してませんね」

部屋中に脱ぎ捨てた衣服や靴、散らかつた機器類を見て彼はそう言つたのだろう。

呆れた口調ではなく、单なる感想の様だった。

尤も、余計なお世話である。

僕はまた、無視。

「不機嫌ですね?どこに副隊長を隠せばよろしいでしょ?」

それくらいは、答えて下さー」

僕は顎でベッドを指した。

「この国では誰も使つていよいよ、クラシカルなベッドだ。

この第三部隊本部で「えられた私室の他にも、これと同じ物が自宅にある。

ジゴガンに我慢を言つて特別に作つてもらつたものだ。

クラシカルと言つても、僕にはそれが普通のベッドといえる物だ。パイプで作つたベッドで、上にはスプリングの入つたマット、化纖ではあるが、シーツと布団と枕で構成されている。

普通の人は、空調と温度管理を自動で行う、睡眠カプセルを使っているが、僕にとつては、これがベッド、寝具といえる物だ。

睡眠カプセルで寝るのは、僕はどうしても慣れない。

岩の上や、床で平氣で寝る事のできる僕だけ、睡眠カプセルはダメだった。

ザグラスがその僕のお気に入りのベッドの端に僕を座らせるようにそつと下ろした。

「では、私は仕事がありますので」

兵隊独特な（気がする）節目節目を強調したお辞儀をしてザグラスは背を向ける。

「ザグラス。こちらを向け

僕は命令した。

「はい」

ザグラスは直立不動で向き直る。

顔は緊張なんて縁のなさそうな、いつものどこか余裕のある表情。僕は人差し指を前からこちらこちらと数回動かしてこちらへ来い、と合図する。

ザグラスは無言で近づく。

僕が座つていて目線を合わせるためか、ザグラスが片膝を付いて目の前に控えた。

そうするや否や、僕は彼の胸座を掴んで互いの鼻が当たるくらいまで乱暴に引き寄せた。

「どうこうつもりだ

僕はできるだけ低い声で言った。

「何が、でしようか？」

細い目の奥で黒い瞳が笑んでいる。

「お前以外に、誰ができる？」

僕はゆっくり、しかし噛み付かんばかりの険しい顔をして囁く。

「何を、でしようか」

「じらばっくれるな。見たんだろ？、あれを」

「はつきり、仰ってくれませんか？」

僕はゆっくりと彼の胸座を放すと、無言で彼の頬を拳で殴った。  
彼は僕から見て左によろめいて床に手を着いた。

大袈裟な。

大袈裟な。

僕は呆れた。

右手で、しかも座つたまま殴つたからそんなに痛くはない筈だ。  
そもそも、兵士がこの位でよろける訳がない。

僕は片目を細くしてザグラスを見下ろす。

「僕は、君にゴーグルをジェガンに内密でメンテナنسしろ、と言つただけだ。

誰が、記録を見ていいなんて言つた？

「誰が、ジェガンやガヴィールに見た内容を話していいと言つた？  
答える、ザグラス＝ファンブル！」

最後の方は怒鳴つていた。

ザグラスは、元のように跪き、にっこりと、口元だけで笑いやがつた。

「ええ、誰も言つておりません。

ですが、副隊長はガヴィールさんに内密でメンテナансしろ、とは言つておりません。

それに、メンテナансには記録のチェックも行なわなければなりません。

だから、私は副隊長のゴーグルの記録映像を見させて頂きました。  
ゴーグルの記録の削除の権限は、隊長と貴方にしかありません。  
貴方はそれを怠つた。

だから、末端職員の私が見てしまつた。

これは、貴方のミスです。

そして、私は貴方の記録映像で気になる事をガヴィールさんに報告しました。

その情報をガヴィールさんがどうするかは、あの人の問題です。  
違いますか？」

殴られた痛みに動じることなく、ザグラスはしぐとした顔で答える。

「屁理屈を言うな。

それを見たなら、最初に僕に報告すべき事だら「ひづか？」  
「そんな、みすみすわかっている結果を辿りつくる人間がいますか？」

「ああ、もう。お前と話していると腹が立つ」

僕は頭を搔き箋つて吐き捨てるように言った。

怒っていたのは僕なのに、何故僕が責められなくちゃいけない？  
イラつく僕に構わず、ザグラスは僕の横に立つた。

「座つても？」

「勝手にすればいい」

僕は両手で頭を押されて俯いたまま言った。

僕から横に、約五十センチほど離れてザグラスは座つた。  
スプリングの軋む音と、僅かな揺れ、僕よりも重たい体重が乗つた事によってそちらに体が少し傾く。

ベッド以外に僕の部屋にまともに座る事の出来るスペースなんてないからだ。

ザグラスは真面目な顔を作る準備か、それとも頬が痛むのか、両手で顔を揉んだ。

「あれは、副隊長の胸中にだけ納めるべき事ではない事くらい、ご自身もわかっているのでしょうか？」

「だけど、君のやつたことは完全な人権侵害だ。

僕のプライベートだ。君が踏み込む事じゃない」

「あれは、貴方個人の問題ではありません。

隊長どころか、隊全体、もしかしたらルテイル国内に関する問題に発展しかないと私は思います」

「あんなインテリジェントな吸血鬼を確認したからか？」

あれくらいの吸血鬼、まだ僕らが発見していないだけで本当はゴロゴロいるかもしないってだけの事だろ？

「」

「いいえ、違います。

今はまだ上層部にこの話はしていません。

今のところ知っているのは、隊長とガヴィールさんと私だけです。貴方の「ゴーグルの映像はおそらくすぐに隊長が破棄する事でしょう。

ですが、いつどこでこの話が漏れるかはわかりません。

またあの様な吸血鬼が副隊長とコンタクトを取りにくる可能性を考えるならば、噂になるのは必至と言えます。

そうなれば、副隊長の立場は非常に危うい物となります

「副隊長の任を降ろされるとか？願つてもないよ」

フン、と鼻を鳴らす。

「わかつているのでしょうか？」

僕の顔を覗き込むように言つたザグラスは僅かに口元が笑つていた。

「…上層部に知れれば、僕がスパイの嫌疑をかけられるとでも？」

「それだけですむと？」

「そこまでお目出度くない。僕だって少しは頭を使つてゐる

「それは、失礼しました」

両手を肩の高さにまで持ち上げて“降参”か、“驚いた”と言つた意味合いを表わすようなジェスチャをするザグラスを冷めた目で睨んでやつた。

「では、これから行動をどうすべきかもわかつていますね？」

「さあね」

ゆっくり確認するような口調を僕はぴしゃりと撥ね退けた。

「副隊長らしい答えですね」

ザグラスはクスクスと笑つた。

しかし、その顔は少し腫れはじめていたせいか、妙に歪んでいた。

それとも、捻くれ者、と思っているからか。

僕はザグラスに叩きつけようと思った様々な言葉を肺に溜め込んで、中の空氣と混ぜ込んで原型を無くし、息と共に室内に放出した。

「もういい。仕事に戻れ  
僕は横目で命令した。

「そのつもりです」

ザグラスは立ち上がり、さつきと同じように敬礼してから、部屋  
を出て行つた。

ザグラスの言つていた事は大袈裟な事ではなかつた。

この国では、絶対の敵は吸血鬼だが、だからと言つて人間の間で対立が無い訳がない。

それは、大きく分けて、ルテイル国に生まれ育つた者と、そういう者の対立。

ルテイル国に生まれ育つていない者とは、僕のよう<sup>えいりょくべき</sup>に永縁壁外の国からこの国へ逃げてきた者や、その子孫である。

僕はよく知らないけど、ジエガンが若い頃は、永縁壁外の人間に対するルテイル国出身の人間の迫害は酷いものだつたと聞いた。

今はそれほどでもないらしいが、差別はしつかり残つている。

特に、上層部の頭の固い連中なんて、代表的だ。

表面上は国民平等を謳つているが、軍でも壁外に向かわせられるのは殆どが僕と似たような人間たち。

つまり、壁外出身者、もしくはその子孫、だ。

この事について、僕には特に不満はない。

問題なのは、そういう僕みたいな人々がクーデタを起こそうとしてはいないかと上層部を筆頭とした人たちが疑つてゐる事。

軍に所属する者はその殆どが壁外へ出る事を仕事一壁内出身者はこの国から出て、危険を被ることをさら嫌がつてゐる為、そのしわ寄せが壁外出身者らに回つてくるのだととしている為に、壁外出身か、その子孫が多い。

その為、彼らはもしクーデタを起こされた場合、勝ち目がないという理由で、何かしらにつけて粗探しをしては、世論を軍の大幅な権限剥奪に持つて行こうとしている。

今回の事も、漏れれば大変な事になるだろう。

軍は、吸血鬼にルテイル国を売ろうとしている、とでも言つつもりだろうと思う。

少しでも思考をする人間ならば、この安易な主張の矛盾点に気付くだろう。

だが、この国内で安穩と僕らの上にどつかりと座つて暮らしている国民は、気付かないかもしれない。

世論は軍の排斥に動くかもしれないし、再び壁外者の迫害へと繋がっていくかもしれない。

ザグラスは、この可能性を心配しているのだと僕は思つ。

彼も、壁外者だ。

彼の経歴を僕は知らないが、彼の過去に壁外者としての何らか苦痛があつたのだろう。

彼は再びそれが来るのを恐れていると、僕は思つ。

ザグラスは飄々とした仕草の奥で、笑みを湛える瞳の奥で、弱い自分を包み込んでいる感じだ。

ある意味とても正直で、大人だと思えて、羨ましいし、少しだけ、尊敬できる。

勝手な行動をした後の僕にガヴィールのお説教よりも堪える罰を与えてくれやがるのは玉に瑕だけ。

そこまで思考を廻らせた時に、内線電話が鳴つた。

内線電話は、不幸なことに、ベッドサイドのデスクから床へと飛ばされていた。

ベッドから降りてわざわざとるのが面倒だ。

緊急ならその内誰かが呼びに来るはずだから、無視しようかとも思つたが、あまりにしつこくホール音があるので、泣々ベットから転がり落ちる。

「どうした?」「

僕はどうにかこつにか匍匐前進で床に転がった電話まで行き、出る。

予想していたのはガヴィールとかジェガンあたりだつたが、耳に入ってきたのは以外にも、可愛らしい少女の声だつた。

「ダイル? 私」

名乗りもしなかつたが、僕にはそれが誰だかすぐにわかつた。

「ここに掛けてきちゃいけないって言つてるだらう?」

僕は窘めるように言つた。

相手には少々刺のある言い方に聞こえたようだ。

「あの、私、その…。『ごめん』

声は感情がこもつておらず、無機質だつたが、僕には相手の落ち込んだ様子が目に浮かぶ。

仕方なく、僕は優しい口調を意識しながら言葉を作る。

「どうしたの? 一体

「あのね、ダイルが言つていた時間より帰りが遅いから、その、どうしたのかなつて

早口で電話の少女が言つた。

早く要件を済ませて切つた方が僕の機嫌を損ねないと判断したのかもしれない。

けれど、相変わらず無機質な声。

帰りが遅いと言われて、丁度そばに床に放置された時計を引き寄せる。

時刻は、二十一時をちょっと過ぎたくらい。

そつか、今日は二十時には帰るって言つておいたつけ。そんな事を今頃、思い出す。

さて、どうするか。

今から帰らうにも、僕は一人じやちょっと、動けない。ジェガンたちに頼もうにも、今頃徹夜で仕事だろう。ふうむ。

状況的には今日はここに泊まるしかない。

でもなあ、心情的には家に帰りたい。

僕が長い間黙つているので少女は僕が怒つたと思ったみたいだ。

「仕事、忙しいんでしよう？」

もう、切らうか？

遠慮がちに言つてくる（様に僕には聞こえる）。

「あ、ああ、うん。

今日は帰れない。

明日、夕方にはそつちに帰るから。じゃあね」

結局、帰れない状況は変わらないと判断し、僕は彼女の返事を待たずに切つた。

切つたあとで、ちょっとそつけなかつたかも、と反省した。

帰つたら彼女に謝らなきゃ。

また匍匐前進してベッドに戻るのは面倒だったので、僕はそのままそこに寝る事にした。

翌日、僕は関節の痛みによる田代めの後、朝っぱらから田まぐるしく動き回った。

というのも、朝礼の十分前に起きちゃったものだから、ろくに風呂も入れないまま朝礼に参加し、その後、副隊長としての雑務をどつさり抱えて待ち構えている一人（＝ガヴィーとジエガン）を振り切るために痛い膝を引き摺りつつ建物中を逃げ回る羽目に陥った。で、現在、十六時、無事逃げ切つて帰宅完了。

というか、早退した。

もちろん、了解は副隊長である僕本人から取つてある。問題なし。

まっすぐ自室のベッドに向かい、どさりと体を預けた。天井を仰いでいると、ひとりでに部屋の照明が付いた。

「おかえりなさい」

照明が灯るとともに、無機質な少女の声が聞こえた。昨日の電話の少女だ。

けれど、声だけ。

姿は見えない。

「ただいま」

僕は急な眩しさに目を細めた。

「今日は、素敵なお土産があるよ」

僕が言つと、彼女は嬉しそうに——実際は無機質な声で——クスクス笑つた。

「なあに？お人形？お洋服？それともお菓子？」

「それ、君に必要？」

「いいえ、いらないわ。少なくとも、今は」

「他の意見は？」

「特に思いつかない。答えは？」

「カルネア」

微かに、少女が息を呑んだ気がした。

僕は待つ。

「生きてたのね？」

「……」  
ずいぶんと長い沈黙のあと、ようやく少女が言った。

僕も同じような思いだったから、わかる。

ようやく吐き出した彼女の言葉は震えていた（様に思えた）。  
けれど、それは喜びに体を震わせているからだということを僕は知っている。

「生きてるかもしない可能性が見えてきたってだけ」

そう言って僕は、クバチとの会話を彼女に説明した。

「目的は何だと思う？」

話を終えて、改めて聞いてみた。

「……少なくとも、貴方に会いたい、と言っているのはカルネアではなさそうね。」

それに、カルネアを連れて来るという言葉に信頼性があるとは思えない。

けれど、その、ク……何とか……」

「クバチ」

「そう、そのクバチとかいう吸血鬼が明らかに、私たちと彼女との関係を知ってる可能性はあると思う。」

けれど、その貴方に会いたいと言っている奴の目的が何なのかは、さっぱりわからないわ」

僕は大きく頷いた。

「僕も同意見。

奴らが何を目的として僕に近づいたのか、何で僕らの関係を知っているのか、わからないんだ」

「それで、どうするの？」

「三日後云々のこと?」

「正確には後二日ね。行くの? 行かないの?」

「どうするのが一番いいのかな…」

きつぱり断りの言葉を吐いた手前ではあるが、僕は口元に指を当てながら考え込む。

「貴方の安全を考えるなら、行かないほうがいい」

彼女が断言した。

「安全、ねえ」

元々、兵士の仕事が安全とは言いがたい、とは僕は言わなかつた。「何が待ち受けているかわからないのよ?」「

壁外に出れば、いつ吸血鬼に襲われるかわからない。

それは、何が待ち受けているのかわからないと同義だ、とも僕は言わない。

「面白そうだから行きたいって言つたら?」「

「止めはしないわ。」

「ただし、私も行く」

「君が?」

ふふふと彼女は笑つた。

「だつて、私だつて、カルネアに会いたいわ」

「本当に彼女かどうかわからないって言つたのは君なの」「

「言つたが何よ?」

むつとした声（に聞こえた）。

僕は口を突き出して不満顔を作る。

昨日といい今日といい、何で僕が責められなきやいけないのぞ。

「可能性に賭けてもいいじゃない?」

どうせ、この国にいてもカルネアに会える可能性なんてゼロだもの。

初めての外出が、彼女に会いに行く、ってね

多分姿が見えているなら腰に手を当ててワインクしてそつだな、と僕は思った。

「でも、どうやって？」

僕はいいとしても、君はどうするの？」

僕の放った疑問に、彼女は朗らかに答えた。

「別に、行くのは本体じゃなくても問題ないでしょ？」

誰も、本体でなければいけないなんて、言わなかつたんだから。

貴方も私も、ね」

「ふうん、そういうこと？」

「ええ、そういうこと」

僕らはニヤリと笑つた。

少なくとも、僕はニヤリと笑つた。

「なんだか、物寂しいっていうか、さびれたっていうか、そんな感じ」

「それ、同じ意味じゃないの？」

僕は辺りをきょろきょろと見渡す少女に苦笑いを漏らす。彼女にとつて、初めての壁外である。

ここまで来る間も、彼女は落ち着きなく辺りを観察している。どんなに観察したところで、岩石群が変わるわけでもないのにね。それよりも、彼女が忙しく視線を移すせいで僕の視界までぶれるから、そろそろ落ち着いてもらおうか。

「ここから、向こうに向かつてあと一・三時間つて所かな。そこまで行くと、キンバリー国との国境。

こことは比べ物にならないくらい、緑の多い場所さ

僕はルテイルとは反対方向を指しながら、彼女に説明する。「場所……ちゃんと、国として機能しているの？」

彼女は僕の示した方向を眺めて聞く。

僕の言葉の選び方が引っかかったようだ。

僕は彼女の視線が一方向を向いたおかげで視界が安定した。

「今のところはね」

僕は肩をすくめて、答えた。

僕は国政というものに興味がないから、彼女の言う国としての機能がどういう定義であるのかはわからなかつたが、とりあえず、僕の中の基準では、おおむね機能していると評価していた。

実際の日で見ると、データで見ると若干の差異があるかもしないが、たぶん情報量としては彼女の方が国外のことについて詳しいだろう。

僕たちは今、先日の吸血鬼、クバチをお迎えにきます、と言つていた地点からキンバリー方面に三キロほど通り過ぎた場所にいた。

なんでこの場所にしたか、特に意味はない。

彼女が喜んでいたから、もつちよつとだけ、もつちよつとだけ、

とバイクを進めていたらこの場所に来てしまったに過ぎない。

「それで、この場所で合っているの？」

「クバチとか言う吸血鬼の指定した待ち合わせ場所」

彼女はキンバリーについて興味をなくしたのか、視線を地面に向

けて聞いた。

「さて、どうだらうね。

実際、時間をきつちり指定された訳ではないし、この辺でいいからって適当に来てみたんだけれど」

「アバウトね。

出合えなかつたらどうするつもりなのかしら」

「全く持つて同感。

あちりさんと考えることはわかんないね。

まあ、いくらこつちが待つにしても、夕方までこはルテイルに帰るつか

「そうね、長居するのも危ないしね。

ばれるとしても、早くて夜中つてといだらうから、余裕はあるけれど

「そんなんに長い間誤魔化せるもの？」

「あら、私を見くびつてもうつちや困るわ。ばれると言つても、私が手抜きをしたら、の話」

「つてことは？」

「今片つ端から情報を塗り替えてるわ「頼りになるねえ」

「そのかわり、五体満足で帰してね？記録がなくても、残骸が残つたら調べられるわよ。あなた、誤魔化せないでしょ？」

「ごもっとも」

僕はしつかりと頷く。

僕は胡坐をかけて座り、地面を見つめる。

強い風が吹くと、お情け程度に生えている草が揺れ、砂埃が沸き立つ。

それだけ。

風と、それが揺らして、吹き飛ばす物質のこする音だけ。

僕も彼女も、それをしばらく、黙つて聞きいっていた。

そうしていると、カルネアに会えるという期待が大きくなつて、気が緩みそうで困る。

もしカルネアの目の前で、カルネアの同族 クバチを斬らなくちゃいけないことになつたらつていう可能性を考えて、少しだけ、困る。

うつかり、気が緩んで、躊躇しちゃいそうだ。

「ところで、ダイル。ゴーグルに異常もしくは反応はある?」

そろそろ暇になつたのか、彼女が口を開いた。

待つこと一時間。

未だにクバチが姿を現すことはない。

まあ、待ち合わせ場所ではないから仕方ないのかもしれない。

「特になし。といっても、あいつレーダーに引っかかるから無意味だよ」

「生体反応感知に切り替えてみてくれるかしら」

「ええ? 意味なくない?」

「こちらに生息してる虫から動物から全部対象になるよ」

「それでいいの。そうね…五分」とピートークをこちらに送つてくれるかしら。

「こちらに近づいてきている熱源が吸血鬼の可能性はあるでしょ? 私が熱源の分類をしていてるから、貴方はデータ送信と肉眼での確認をお願いね」

「そんなに同時進行して負担にならない?」

僕は心配して言った。

僕の安全のために彼女が壊れてしまうのは、僕にとっては不本意だ。

「気にするなつていつも、貴方は聞かないのでしょうか?」

「当たり前。これ以上の働きを僕は君に求めていない」

「限界になつたら泣き出すわよ。もつこなことしたくないって

「どうやって?」

その疑問に彼女が答える前に、僕らを招待したやつが現れた。

クバチだ。

クバチを認識するよりも、僕と彼女の視線は彼が連れてきた吸血鬼に注がれた。

黒いフードを被つた吸血鬼。

あれが、カルネアなのか。

食い入るように、その吸血鬼とカルネアとの共通点を探した。けれど、その吸血鬼は目深なフードつきの、全身黒くてだぶついた服を着ていて、髪の一筋さえも見せておらず、辛うじて覗く口元でメスだらうと判断できるにどまつた。

僕にはその背格好や口元だけからカルネアかどうかを判断することができなかつた。

記憶の彼女より、その吸血鬼は背が低いように思われからだ。もつとも、僕らが幼い頃の記憶だから、そのときの身長差を考えると、可能性がないとは言い切れない。

「どう思う？」

僕はクバチの連れている吸血鬼を見つめながら、彼女に聞いた。

「あれでは本人かわからないわね」

至極もつともな答えを彼女が言つ。

彼女の方が、今は僕より冷静かもしけない。

「先日、ナクタルシータ様の乗つていた乗り物と同じです」

僕と彼女が吸血鬼に見入つていてる間にクバチが僕のバイクを調べていた。

正確には、同じではなく、同じ型モデルのバイクだ、と突つ込みたい気もするが、ぐつと我慢。

壊したのはクバチ達なんだから、同じものであるはずがないとわかつてゐるだらうに。

「おそらくこの近くにいらっしゃるでしょ。

私は探しにいきますが、貴方はどうしますか？」

クバチがフードの吸血鬼に向かつていつた。

吸血鬼は顎を動かして、行け、という意思を示した。

クバチはそれに頷くと以前見たときのような素早さであつといつ間にいなくなつた。

全身を布で覆つた吸血鬼だけが、残される。

「話しかけてみたほうがいいかな」

僕の中でそれはもう決定していたが、一応、彼女に聞く。

「もう少し様子を見てもいいんじゃないかしら」

「どうして？」

「あの吸血鬼とクバチとの関係が不透明だから」「關係などどうでもいいことだと僕は思った。

僕らに重要なのは、あの吸血鬼が本物か、偽物かだけだ。彼女の言葉を無視して、話しかけようと僕は吸血鬼を見やる。そこで僕は、驚きに体を一度だけ大きく震わせた。件の吸血鬼が、僕らの目の前にいたからだ。

吸血鬼は、僕らのバイクを触つていてるようだ。

おもむろに、吸血鬼はフードを取り除いた。

僕は息をのんだ。

その顔は、間違いよつもなく、僕らのカルネアだった。

彼女を見た瞬間、僕の頭の芯が、ぼうつとした。

あの日以来、求めてやまなかつたまさにその存在が、手の届きそ  
うな距離に、いる。

そのことに、癪のよろこび震えているのは、喜びのせいだけだと思  
いたかつた。

少しだけ黄みを帯びた、ゆるいウェーブの白髪も、優しげな弧を  
描く髪と同色の眉も、潤んだ紅い瞳も、真っ白な肌も。

幼い記憶のまま。

老いることもなく。

少しも違わず、僕らの養母はそこに立っていた。

「間違いじゃ、ないよね」

僕の中で答えは決まっていたが、彼女に同意を求めた。

「少なくとも、外見は私たちのカルネアだと、思う……」

彼女はいまだ、確定的な言葉を示さない。

まったく、彼女は冷静・慎重だ。

彼女おかげで、僕は苛立つどころか、熱くなつた頭を冷やすことができる。

確かに、こんなつましい話があるわけない。

三年間、僕らは探していたんだ。

僕が、兵士になつてから、三年間。

兵士になれば、壁外へ頻繁に出られるから。

あの日から、生き別れてしまつた養母を、三年間探した。

その期間が、長いのか、短いのか。

人によつて違うだろう。

けれど、生きているのか、死んでいるのかもわからないカルネアを探すことは容易じやなかつたことだけは確かだ。

カルネアは吸血鬼だ。

単純に、各国を訪ねて捜したところで、街中で吸血鬼に出会えることはまずない。

各国はルテイル同様、街を永緑壁で覆うことで吸血鬼の襲来から身を守つてゐるからだ。

つまり、吸血鬼のことを人間の中から聞き出そうとするには、壁外へ出る機会の多い、その国の兵士に聞くより他はない。

しかし、兵士にとつて、吸血鬼は襲つてくる獣と同義だ。

殲滅する対象の個体差など、気にかける者などいなかつた。

少なくとも、今までそんなことを気にする兵士に出会つことはなかつた。

人から得られる情報は、ほとんど無かつたんだ。

初めて壁外へ出て、吸血鬼に出会つたときは、吸血鬼のことは吸血鬼に聞いた方が早いと思つた。

けれど、接触する吸血鬼はカルネアと同族であるのが疑わしい者ばかりだった。

対峙する吸血鬼たちは話しかけても、唸り声を上げるばかりで反応しない者が多く、言葉は理解している風な者もいたが、それらにしても、まともに対応する個体は皆無だった。

目の前の人を一僕を一食うこと。

それしか頭にない連中ばかりだった。

仕方なく、僕は自分が任務に就くときはもちろん、他の部隊が任務で被害にあつた時も、現場に行つて一被害者の遺体のサンプリングという大義名分をかざしながらカルネアの首が落ちていないかを確認するしかできない毎日だったのだ。

他国が被害にあつたという情報を聞けば、できるだけそちらにも足を運んだ。

そうして、養母<sup>はは</sup>の首が落ちていないことに安心し、どこか知らないところで蛆の湧く生首になつてているのでは、と嫌な思いに身震いし、カルネアがそんな簡単に殺されるはずがないと否定した。

それが、いきなり現れたクバチという名の、まともに対応できる吸血鬼に出会つて、こんなにあつさりと、カルネアと思しき個体が現れたのだ。

そう、あまりにも、簡単に。

疑つてかかる彼女の方が、僕は正しいと思つた。

そう、“外見”はカルネアに間違いなかつた。

けれど、“中身”まで、カルネアである確信を僕らは抱けずにいた。

そういう実例を身近においている僕らとしては、そういう疑いを抱けずにいられなかつた。

この間にも、カルネアと思しき吸血鬼は、興味深げにバイクに触れていた。

「ねえ

僕は彼女に話しかける。

「…なあに？」

たぶん、彼女はもう僕の考えが分かっているからか、嫌そうに返事をした。

「攫えないかな。この吸血鬼をさ、ルテイル内に」

我ながら、物騒な発想だ。

念のため、と実行できる手段を用意したのは彼女だけどね。

だからこそ、嫌なんだろうな。

「一応聞くけど、門以外から吸血鬼を入れる方法に心当たりが？」

永緑壁が、なぜ吸血鬼を阻むのか知らないわけじゃないでしょ？

？」

「それ以外の方法なんて、僕が思いつくわけないじゃないか。

門を使えば、吸血鬼だって簡単に国内に入れれる

「思つた通り、馬鹿なこと！」

映像は私が塗り替えられるとしても、肉眼は誤魔化せないのよ？？

門を使えば沢山の目撃者ができる。

あなたの権限で、第三部隊の門を使うことができても、上層部に

不要なエサを「与える」と「…ジエガン達に手が伸びる」とになるのよ。

それをわかつた上で、あなたは言つていいの?

「もちろん、わかつた上で言つてるよ。

けど、カルネアを見つける糸口なんだ。

みすみす逃してたまるものか。

もちろん、この吸血鬼が間違いなくカルネアであるとわかつたなら、僕はカルネアと一緒にこの国を出て行くよ。

カルネアと一緒にいられるのなら、ルティルにそれ以上留まる意味はないんだから。

そうだろう?

その時は、間違いなく、君も一緒に」

反対する彼女に対して、僕は最後の言葉を、殊更ゆつくりと言つた。

彼女が沈黙する。

僕はさらに言葉を続けた。

「それにね。

それなりの理由で吸血鬼を国内に入れられる場所が、一つだけあるの、君、忘れてるじゃないか

あ、という彼女の小さな声。

「「マツド・マディの研究所」」

僕らは声をそろえた。

「決まりだね」

僕は今度こそ彼女の答えを待たずに、音声スイッチを入れた。

「あまり触らないでもらえるかな?  
くすぐったくてたまんないんだけど」

僕は軽くジョーク。

突然喋り出したバイクに、カルネア（仮）が驚いて手を引っ込んだ。

吸血鬼は少しだけ距離を置くように後ずさる。

「生き物だったの？」

吸血鬼は驚きながらも確認してきた。  
ああ、声も記憶の中のカルネアにそっくりだ。  
ドキドキしちゃうね。

「残念ながら。

君が見ているのは、ただの乗り物。

僕はルテイル国内からこの乗り物につけた音を伝える道具を介して君と話している。

音だけじゃなく、君の顔だって、僕には見えているよ」

そう、僕らはクバチ達に会いに行かなかつた。

厳密には、僕ら自身は。

バイクを遠隔操作して、送られてくる映像や音声を僕と彼女は、部屋でのんびりと見聞きしていた。

これは、彼女のアイデア。

これなら、もし騙されといふと、被害は最悪バイクだけで済む、  
とうわけ。

ちなみに、無人バイクが目撃されたところで、問題にはならない。物資輸送の先見に使用されることがあるからだ。まあ、ここみたいに、ルート外でバイクの残骸が見つかったら問題だけだ。

「ナクタルシータ？ あなたなの？」

吸血鬼は眉をひそめて問うてきた。

理解が早くて助かる。

「それも残念ながら、違うね。

僕はウェンダイル＝デューター。

ダイルって呼んで。

君が、クバチが言つていたカルネア？」

「ええ、そうよ。あなたはどこにいるの？」

答えながら吸血鬼が周りを見渡した。

「付近を探しても、僕を見つけることはできないよ。

僕は今遠くにいる。

君は、僕に会いたい？」

吸血鬼は、逡巡したようだった。

「あなたの姿が見たいわ」

僕はにこりと笑った。

まあ、相手には見えてないけど。

「OK。じゃあ、そこにじつとして」

言つが早いが、僕はとあるスイッチを押した。

「！？！」

バイクから飛び出した網が、吸血鬼を捕えた。あつけない。

網の中でもがく吸血鬼。

手で引き裂こうとしているけれど、早々ちぎられるような代物じやないはず。

吸血鬼の力を考えれば時間の問題かもしれないけれど、しかしまあ、簡単に捕まつてくれたものだ。

「こりやあ、偽物の可能性が高いね」

僕は少しだけ落胆した。

「じゃあ、逃がす？」

沈黙を守つていた彼女が問う。

「御冗談。お持ち帰りは決定事項だよ」

すでにバイクは発進していた。

バイクは吸血鬼入りの網を引きずつて、ルテイルへと進路をとる。網の中では吸血鬼が変わらずもがいているのか、うめく声が聞こえる。

バイクの後方を映すカメラはないので、確認はできない。摩擦と吸血鬼の腕力で網が破けないことを祈る。

「ダイル、あなたつて…。

カルネアかもしけないつていうのにこの扱いはないと思うんだけど」

自分が用意したくせに、彼女の呆れた（様な）声。

「こんなにあつさり捕まらなかつたら、もつと丁重に扱つてたよ」

養母はこんなものに捕まるほど鈍くはない。

それに、僕は優しい人間でもない。

「クバチ！！

どこにいるの！？」

引きずられながら、吸血鬼が叫ぶ。

「カルネア！？」

「クバチの声がしたが、後方にいるのだ、彼の姿は見えなかつた。

おそらく追いかけているのだろうけれど。  
いくらクバチが足が速かるつと、バイクに追いつくことはできない。

残念だつたね。

カルネア（仮）はもらつていくよ。

「さて、じゃあ、マッド・マディのところに行つてくるよ。  
あの吸血鬼が到着する前に話をしとかないと。

あとのこと、頼むね」

僕は外に出るために上着をクローゼットから取り出した。  
当然、相棒も腰に下げる。

「聞きそびれてたけれど、あなた、マッド・マディと面識あつたの  
？」

「ん？ ほほないけど、それが？」

僕は上着に袖を通しながら、きょとんと聞き返す。

「面識ないのに、すぐに会えるはずないでしょ？」

「マッド（狂つた）なんて言われてるけど、あれでも一つの研究所  
を所有できるほどの人なんでしょう？」

「あー、大丈夫大丈夫。

問題ない。

彼はジエガン崇拜者なんだよ」

僕は手をひらひらと振つて答える。

「つてことは……」

「ジエガンの子供である僕を思いつきり嫌つてゐる。

嫉妬でね。

じゃ、行つてきます

「不安だわ…」

彼女の咳きを背に、僕は部屋を出た。

だからこそ、すぐこの会えるつていうのに、彼女は心配性だ。

## 25（後書き）

ここにきて、主人公の正式名がでました。  
主人公の名前は、「ウェンダイル＝デューター」です。  
そのうち登場人物一覧（多少のネタばれあり）を投稿するつもりです。

ルテイル国内には、街を囲んでいる永緑壁えいりょくへき内に更に永緑壁で覆う施設がいくつもある。

マッド・マディが研究所長を務めるここ、国立吸血鬼生態研究所はその中の一つである。

その上、珍しいことにこの研究所は国境も兼ねる、永緑壁に隣接して建てられている。

他の研究所はといふと、永緑壁で覆われた街の中心に建てられているのだが、この研究室だけ、ぽつりと永緑壁に隣接されている。理由は簡単。

研究内容が吸血鬼の生態であるからだ。

吸血鬼の生態を調べるために創設されたここは、定期的に数体の吸血鬼の首なし死骸が運び込まれ、日々吸血鬼対策のための研究がなされている。

そして、極稀ではあるのだけれど、生きたまま一上手く半殺しされ一捕獲された吸血鬼が運ばれてくることがある。

そういうた吸血鬼は死骸ではわからないことの調査や、生体実験に使用される。

当然、永緑壁内に生きた吸血鬼を運び込むことは、同じ部屋に猛獸と同居することに等しい。

そのため、万が一吸血鬼が逃げ出した時の保険として、街内から遠い国境一永緑壁付近に隣接されたうえ、研究所の周りをさらに永緑壁で覆っている。

永緑壁は、未だに謎の解明されない光物質だが、どういうわけか、吸血鬼がその光にさらされると、脳が溶ける。

他の生物には一切影響がない。

まさに、吸血鬼から国を、人を、守る“壁”となるのだ。

故に、研究所から逃げだせたとしても、吸血鬼が国内で暴れることはない。

研究所の人間に被害が出るとしても、まず研究所を覆う永緑壁によつて吸血鬼は死んでしまう。

まあ、永緑壁を遮断するために設置された装置一門ゲートを使われたら、僕ら兵士の出番になるんだけれど、門を使用するなんて頭を働かせる吸血鬼はいないという前提。

ほら、吸血鬼つて クバチみたいなのは希少な例外だが 頭使わないヤツばっかりだから。

クバチらの例を考えると、こちらも甘しきるいけどね。

僕はその研究所の受付レセプションといつても、内線がぽつんと台に置かれているだけの狭い空間ルームに立っていた。

ぐるりとその空間を見渡して、監視力カメラがないこと 不用心ミスを確認した後、内線で所長室へとコンタクトをとった。

「ホール音がいくらも鳴らないしね、繋がる。

「こちらは、所長室でございます。アポイントメントはござりますか？」

ない場合は、事務室へとお問い合わせの上、手続きを行つてください

さい

事務的な男性の声がした。

たぶん、秘書か何かだろう。

「アポイントメントはないんだけど、マディに第三部隊のデーターが来たつて言つてくれる？

その方が話が早いから

「少々お待ちください」

一分も待たず、再び男の声が案内した。

「では、左のドアへどうぞ。案内の者が待機しております

左のドアが左右に分かれてスライドした。

「 ジョルジ！」

出迎えたのは、女性。

にこりともしないし、服装は白衣だ。

研究所員で間違いないだろ？

研究物を運び込む兵士以外には、所員しか出入りする「」ことがない  
のでこんなものなんだろう。

女性に案内されたドアのプレートには“所長室”と書かれている。  
女性はドア横の電子版を操作し、中と連絡をとった。

「デューターさんをお連れしました」

すぐにドアが開く。

中から人が飛び出してきた。

「ああ、ジョガン！！！」

自ら会いに来てくれるなんて、嬉しいわ！！！」

その人物は、僕に抱きつこうとして、寸前で止まる。

その顔が、見る見るうちに不快さへと歪んでいく。

「どうして“七光り”の方がいるんだ！！！」

怒鳴った声も体つきも、間違いなく男、だった。

目の前には、ボサボサの髪、鍛え上げた兵士を見慣れた僕からすれば軟弱そうな体つきに、青黒いクマの目立つ色白の、白衣を着た男が一人。

「僕も、デューターに間違いはないんだけど？」

僕は小首を傾げて目の前の人物に向かってにこりと笑った。

不愉快気に、その人物——マッド・マティは絡まって鳥の巣状になつた髪をさらに搔き鳩つた。

ああ、更にかわいそうな頭になつてる。

「クツソ！！てめえだつてわかつてたら研究所から放り出しちゃつたのに！！！」

「何で言わねえんだ、あんの馬鹿秘書…………」

「どっちか聞かない君も君だよ。」

「今からでも遅くはないと思つけど、僕を放り出したら、後悔するのは君だよ？」

「マッド・マディ。」

「ねえ、聞いてる？？」

「おれの名前はマディじゃねえ！！ロバートだ！！！」

忌々しげにマディが吐き捨てる。

「こいつ、話聞いてないな。」

「マディアスでしょう？ 本名は」

「とりあえず、落ち着くまで乗つてあげよう。」

「マディはマッドと音が似てるから嫌いなんだ！！！」

「つか、おれはMADじゃねえ！！」

「他が嫌がる仕事を引き受けちゃつてるんだ！！！」

もともと体力がないのか、ひとしきり怒鳴つてハアハアと息をつくマディ 改めロバート。

見た目通り軟弱だな。

「…それより、てめえなんかにや用はない。」

「おれは忙しいんだ。放り出される前に出ていけ」

呼吸が落ち着いたころ、ロバートが低い声で告げる。

「いや、僕は用があるから来たんだけど」

「やつと、こいつの話ができるかな？？」

「七光りの用事など、聞いてやらん。」

「おれはお前が嫌いだ、以上。」

「いっつを放り出せ」

最後の言葉は、今まで人形のように黙つて事の次第を見守つていた女性に向けてのモノだった。

つていうか、放り出される前に、とか言いながら放り出す気満々じゃないか。

女性に力負けするような僕ではないけれど、危害を加えるのは確実に僕の方だから、おとなしくした方がいいかなあ？

でも、後悔するのはロバートの方だろうから、一応、女性に促されながらも言つてみた。

「いいの？」

今、イイ具合に生の吸血鬼を運んでる所なんだけど、いらないの？  
いらないんなら、放しちゃうように連絡するけど」

途端、ガシリと肩を掴まれた。  
ひ弱な体のどこにそんな力があるんだ、ロバート。

「ゆつくりと相互理解を深めよつじやないか、なあ、七光り」

中年オヤジのキラキラした瞳は正直気持ち悪い。

その目をマジドと言わすして、何と形容すべきなのか、と僕は思つた。

## 登場人物（27話までの登場人物）（前書き）

多少ではあります、まだ出てきていな設定も書いてありますので、嫌いな方は読まないでください。

## 登場人物（27話までの登場人物）

（）内の名称は基本的にニックネーム、年齢は初登場時の年齢です。

### ＜ルテイル国＞

・ウェンダイル（ダイル、ナクタルシータ）＝デューター（14）  
本編の主人公。

ルテイル国軍第三部隊副隊長。

実年齢に似合わないほど大人びた思考と誰に対してもドでかい態度を持つ皮肉屋。

特定の人間と吸血鬼以外には基本的にドライ。

吸血鬼カルネアに育てられていたが、8歳の時に他の吸血鬼に襲

われ、兄弟を失う。

養母ははであるカルネアは不在だったため、生き別れだと本人は考えている。

ダイルだけが、左の肘から下部分を奪われながらも逃げのび、ジエガンに保護される。

その時の記憶は曖昧。

その後、ジエガンの子供として育てられる。

“ナクタルシータ”は自分の名前であると認識しているが、“彼女”以外の他者に対してそれを認める事はない。

・ジェイガン＝ディル（ジェガ）＝デューター（61）

ダイルの保護者。

ルテイル国軍第三部隊隊長。

国でも屈指の科学者としても有名。

ダイルの左腕を与えたのもこの人。

自称、おちゃめなジジイ。

自称、おしゃめなジジイ。  
ダイルの皮肉屋な性格はこの人の影響を大いに受けていると言つていい。

ダイル曰く、親バカではなくバカ親なジジイ。

・ガヴィール（ガヴィー）＝ベイト（36）

ルテイル国軍第三部隊副隊長補佐官その1。  
ダイルの第2の保護者の存在。

好き勝手な行動をするダイルに振り回されている。

年少者のダイルを上司と認めるおおらかな性格である。  
基本的に人がいい。それ故に苦労人。

恐妻家らしい。

・ザグラス（ザック）＝ファングル（24）

ルテイル国軍第3部隊副隊長補佐官その2。  
永縁壁<sup>えいりようへき</sup>外出身者。

ガヴィールとともにダイルに振り回されている…様に見えて、それを楽しんでいる節あり。

笑顔で嫌みや皮肉やあてこすりをダイルにさらりと言いつ。  
たぶん腹黒。

科学者の卵でもあり、ジェガンの研究を手伝つていて。  
ダイルのある意味協力者。

・彼女（？）

ダイルの自宅部屋に住んで（？）いる、声だけの住人。  
姿を見せたことはない。

声は平坦で感情はないが、ダイルは何となく彼女の心の機微を読み取つていて。

ネットワークや情報処理（主に隠ペイ工作）が得意。

ダイルとともにカルネアを探している。

ダイルのよき理解者であり、唯一隠し事をしない相手。

- ・ロバート（本当はマティアス）＝ゾーイ（43）  
通称、マッド・マティ。

国立吸血鬼生態研究所所長。

ルテイル屈指の科学者であるジエガンを敬愛するが、その子供であるというだけで色々と優遇されているダイルが嫌い。

というか、常にジエガンの周りにいられるダイルに嫉妬している。むしろ自分を養子にしてほしい。

研究者としては優秀だが、没頭する姿と執着具合は周りをドン引きさせるくらい異常。

本名が嫌いらしく、ロバートと名乗っている。

〈吸血鬼〉

・カルネア

ダイルたち兄弟の養母。

ダイルたちが襲われた時以来、消息不明となつていて。

・クバチ

ダイルの前に現れた、物腰優雅な吸血鬼。

ダイルのことを“ナクタルシータ”と呼ぶ。

カルネアとダイルたちとのつながりを知つてゐるらしい。

## 登場人物（27話までの登場人物）（後書き）

とりあえず、マディアスが登場するところまできたので、登場人物紹介をば。

また、再編集作業終了のため、24 27話は新たな話が追加されています。

マディアスは27話に登場しています。

「それで、その吸血鬼は今どんな状態なんだ？」

所長室のソファで僕とロバートは一人きりで向き合った。  
お茶なんて出さないとこりが、嫌われるなあって感じだね。  
気にしないけど。

「今、僕の軍では無人探査にいろいろな機能を搭載する試験をやつてるんだ。

で、今回のバイクには捕獲網を搭載してね。  
まあ、一回目で捕獲に成功しちゃったもんだから、ビラじょうかつてことになつてさ。

丁度いいから、君の所に搬入しようつてことで、僕が来たわけ。  
一応、網の強度が不確定だから、ここに来るまでに網が破けるつて可能性もある。

正直、確実にここに搬入できると確約はできない。  
けど、ほぼ無傷の吸血鬼だよ

僕はデータラメを交えつつ説明する。

「大変魅力的な実験材料の提供に感謝する、ビジェガンに伝えてくれ。

が、それは、ちょっとビリビリじゃないか？」

ロバートが心配するのはわかる。

普通、半殺しの吸血鬼は半殺し直後に兵士によつて専用の拘束具を付けてから研究所に引き渡されることになつている。

しかし、今回の吸血鬼は生け捕りのため、そのような拘束具をつ

けぬまま門ゲートをくぐることとなる。

そうすると、研究所員自ら、吸血鬼に拘束具をつけねばならなくなるのではないか、とロバートは言っているのだ。

所員たちが被害にあつことは間違いない。

「だから、僕が来たんぢやないか。

ただ搬入の旨を連絡するくらいなら、通信で十分だよ。拘束具、付ける人間いないでしょ？」

搬入する前に取り付けてあげる」

「ふむ、それならば、一応受け入れる用意をしておこう。ただし、網が破れて逃がしたならともかく、拘束具をつけようとして取り逃がしたら、一度とこの研究所に立ち入ることは許さんからな。

瀕死状態にもするなよ

「難しいこと言つなあ。

できるだけ、腕をもいだりはしないよつ氣をつけるがださあ。とりあえず、拘束具頂戴よ。

あと、僕これ、休日出勤で、装備忘れちやつたから貸して。上手くいけば、あと30分くらいで国境ゲート：研究所の門から1メートルと離れてないけど、一番近い門に到着するよつ設定してるから

ら」

僕は今、戦闘服ではなく、私服だ。

相棒は腰に下げて居るけどね。

「はあ！？？？

30分だと！？

急すぎるだろ！？！？

言いながらロバートは内線に手を伸ばし、次々と指示を飛ばし始めた。

「急だつたから、僕も装備できなかつたんだよ  
僕だつて、吸血鬼を捕まえる予定はなかつたんだ。  
念のためにと彼女が用意した捕獲網を、まさか使うとは思つてなかつたからね。

お待たせしました！！！

実は作者、交通事故に（トラックにぶつかられ）まして、しばらく休養しておりました。

ペースは落ちますが、少しづつ、継きができ次第UPしていきます。

研究所に戦闘服等の装備はない、とロバートに突っぱねられた僕は、仕方なく大急ぎで本部の私室に向かい、装備を整えた。誰にも見つからなかつたのは、ラッキイ。

それにしても、装備くらい置いとかないと、あの研究所危ないよ。いつ必要になるか分かんない危ないことしてるとぐせに。ま、自宅に装備を置いていない僕も僕だけ。

僕は研究所に戻りながら、ゴーグルを使って彼女に連絡をとる。すぐに対応した彼女は、後部を映すカメラがないから確実とは言えないが、音声から分析して、まだ吸血鬼はバイクに引きずられているようだ、と報告した。

意外と、捕獲網は丈夫だつたみたい。

ついでに、彼女に第三部隊本部とその付近で捉えられた僕の映像の消去を頼んだ。

ザックならともかく、ジエガンやガヴィーに見つかることあるさ。

「手負いの獣はなんとやら、よ

」彼女が言つので、僕は軽口をたたいた。

「手負いの獣よりも、たちが悪いに決まつてゐる。

僕の無事を祈つてね」

大サービスで、投げキッスもつけてから、通信を切つた。

研究所で拘束具を受け取り、<sup>ゲート</sup>門前で待機する。

吸血鬼が来るまでに、ストレッチをして体をほぐしておぐ。

うん、膝の調子もいい。

相棒のバッテリイも充電したばかりだし、準備万端。

時計を確認するまでもなく、遠くに土煙が肉眼で確認できた。もうすぐだ。

研究所の門<sup>ゲート</sup>から見学しているロバートを含めた、数名の所員に手を振る。

ロバート以外の誰もが、緊張でこわばつた顔をして、誰も応えてくれない。

見世物じゃないつてのに、これだけサービスしてるんだからさ、応えてくれればいいのに。

ノリが悪いなあ。

もつとも、ロバートにしても、興味は吸血鬼だけみたいで、やつてくる土煙に瞳をキラキラを通りこして、ギラギラと輝かせて、一心不乱に見つめていた。

やつぱり君は、マッド・マディだよ。

これまで、僕が彼に会ったのは三回。

初めて会ったとき、僕の横にジエガンがいなくなつた途端、彼は初対面の僕に嫌いだの、親の七光りだのといって、嫉妬で濁つた瞳で睨みつけたことを思い出す。

今回も、僕だとわかつた途端、すごい拒否を示した。

それなのに、吸血鬼を提供するという話になるや、きちんと僕の話を聞こうとする。

ほんとに、研究が好きなんだねえ。

研究のためなら、大嫌いな僕の話でもちゃんと聞くんだから。

僕は一人微笑みながら、装備と拘束具を最終点検し、ゴーグルを嵌めて戦闘モードに切り替えた。

相棒を鞘から抜くと、刀身の代わりにレーザ・サーベルが輝く。相棒が輝くと同時に、僕は思考も、切り替える。

さあ、僕とどんなダンスをしてくれる?  
楽しみだね、カルネア（仮）。

バイクが、土煙をあげてやつてくる。  
その後ろには、網に捕獲された吸血鬼がいるはず。  
僕はバイクの輪郭がぼんやりと肉眼で確認できる距離になると、  
リモコンでバイクを止め、そちらに向かって、ジャンプ・ブーストを  
使って駆け出した。

あまり、永緑壁に近づけたくなかったからだ。  
うつかりそちらに突き飛ばしてしまえば、吸血鬼は簡単に死んで  
しまう。

今回の目的は、本物にしろ偽物にしろ、生け捕りだ。  
そんな事態は御免だった。

近づく間に、網がブチブチとちぎれる様が確認できた。  
ちゃんと中にいたことがわかつて、むしろ安心。  
けど、ああ、これで網の上から拘束具をつけるつていうのは無理  
になつた。

一番傷つけずに捕獲できる手だつたんだけどな。

つまり、拘束具をつけてから網をレーザ・サーベルで切つちゃう  
のが手つ取り早いんだよね。

まあ、僕としてはダンスを踊る気満々だったから、これでもいい  
んだけど。

ゆらりと立ち上がる、吸血鬼。

先手必勝とばかりに、僕は切りかかった。

すでに僕を見つけていたのか、吸血鬼は僕の第一撃をすんでのと  
ころでかわしてくれた。

僕は一度、距離をとつて様子をうかがつ。

記憶のままの養母の姿が、映像で見るより眩しい。

思わず、ゴーグルの下で目を細めた。

けれど、まだ確信が持てない「ひは」、これは、ただの吸血鬼。

そう、ただの吸血鬼。

自分に言い聞かせないと、気が緩みそうだ。

体は戦闘モードなのに、心が集中できていないのに気づく。

ほらほら、気を抜くなよ、僕。

油断していると、喰われる……かな？ わかんないや。

対峙する僕を、茫然と眺めた吸血鬼は、やがてやんわりと、微笑んだ。

「やつぱり、ナクタルシータ、じゃないの」「マイクを通すよりも鮮烈な、<sup>はは</sup>養母の声に、僕は少しだけ、戸惑つたがぐつと腹に力を込めて耐えた。

「はじめまして、カルネア。

僕が、さつきの声の主。

「ウェンダイル… ダイル＝デューター。よろしくね」言いながら、僕はレーザ・サーベルを両手で持ち、左下に構えたまま、吸血鬼に迫る。

狙うは右腕。

吸血鬼は大きく宙返りをしながら後ろへ飛んだ。

僕のレーザ・サーベルは空振り。

着地よりも少し遅れて、ゆるいウェーブの髪がふわりと落ちた。

おつと、なるべく無傷、だった。

足の腱を狙う方がいいかな？

あ、でも足くらいなら、切り落としてもいいかな？

考えながらも、体は吸血鬼の胸を、首を、腕を、そして足を狙つて攻撃を繰り出す。

致命傷にならない程度に、加減はする。

「ナクタルシータ？」

どうして、そんなことを言うの？」

「ちゃんと、顔を見せて。

その、顔を覆ってるものをとつて」

「私の顔を、その目で見て。

懐かしい、あなたのその目を、私に見せて。

あなたの、綺麗な、青く光る、黒い瞳を」

「あなたの瞳の色、とても大好きよ。

あなたのその髪も、あのころと同じね。

あのころより、少しだけ長くなっちゃつてるけど、変わつていな  
くて嬉しいわ」

「ねえ、何か言つてちょうだい。

私のこと、忘れてしまつたの？

私の、かわいい、ナクタルシータ。

私と一緒に来て頂戴。

そうすれば、絶対、思い出すはずよ」

吸血鬼は、僕の一撃ごとに、それをふわりとした動作でよけながら、優しげに話しかける。

僕は、動搖なんてしていない、つもりだつたけどガタガタだ。

数回の攻撃で、それを自覚する。

クバチなんかより断然遅い動きで、攻撃をしても来ない吸血鬼に一太刀も当たられないなんて、本当に異常事態。

だって、今ゴーグルに覆われている、僕の目は、吸血鬼の言つ通り、青く光る黒、なのだ。

お待たせしました！――！

もう30話だとこのにあまり話が進んでませんね；

次回からはもうちょっとお話を長めにして話が進むようにこじてこないと想います。

また、お話を長くする分、推敲時間や誤字脱字等確認が幾分おひそかになるかと思ひます。

もし、誤字脱字等、ありましたら教えてください。

他にも、これって辻褄あつてる？といった矛盾点などがありましたら、遠慮なく教えてください。

よろしくお願ひします。

もうひろん、感想もお待ちしております！――！

「ゴーグルは、相手側からみると、鏡面になつてている作りだ。つまり、ゴーグルをつけていない時の姿を知らない限り、目の色など知る由もない。

僕は今回、この吸血鬼と接触する前から 最初から ゴーグルをつけていた。

クバチと対した時だつて、ゴーグルで目は隠れていたから、わかるはずが、ない。

なのに。

それを、当ててきた。  
背筋がぞわりとした。

本物？偽物？どっち？

単純な僕の思考回路は、都合のいい方を支持しようとし、彼女の冷静な声を思い出して、打ち消す。

幸い、体はきちんと攻撃を止めない。  
あつさりとよけられてはいるけれど。

これって、幸い？

「おい、何を手間取つてゐるんだ、七光り」  
イヤフォンから、不機嫌な声が流れた。

ロバートだ。

距離が結構あるから、あちらからどれだけのことが見えているのかはわからないが、いつまでも帰つてこない僕に、業を煮やしたのだろう。

その言葉を理解した瞬間、僕はすごいショックを受けた。

手間取つてゐる？誰が？冗談だらう？

他人からさえ、そんな風に見えるなんて、まったく、僕つて。苦笑い。

よくよく考えれば、あの時、クバチは僕を観察していたはずだ。ゴーグルを外したところも見ていたに違いない。

それを、この吸血鬼は聞かされているつて可能性が高い。もしくは、彼らがあらかじめ、ナクタルシータの外見を知つているつてことかもしれないし。

とりあえず、現実に引き戻してくれた、ロバート、君に感謝、かな。

「ねえ、カルネア。

ずっと気になつてたんだけどさ、ナクタルシータつてそんなに僕に似てるの？

そいつつて一体なんなのさ？

僕は構えたまま、立ち止まり、尋ねる。

とつさに思いついて。

そうなんだ。

ナクタルシータが何なのか、カルネアは知つてゐる。

僕らと、カルネアだけが、知つてゐること。

いくら、僕らとカルネアの関係を知つてゐるつていつても、クバチや偽者がこれを知つてゐるとは思えない。

カルネアなら、迷わず、満足のいく答えをくれる。

吸血鬼は変わらず、やわらかく微笑んで、両手を広げて、前に差し出す。

まるで、この胸に飛び込んできて、と言つてゐるみたいだった。

「似てるも何も、あなたが、ナクタルシータ。  
私の唯一。私のすべて。私の愛し子」

その瞬間、僕の頭はすつきりとした。

うん、こいつは偽物だ。  
これは、確実。

はやくこいつやって確かめればよかつたよ。  
僕つて、ほんとに頭の回転悪いなあ。  
人のこと、笑ってられないよ。  
カルネアに関して、僕は本当に盲田になってしまつ。  
危ない傾向だ。  
気を、引き締めないと。

僕はちょっとした賭けをしようと思つた。  
こいつは、僕をどこかに連れていく為の、エサとして連れてこられた。

僕を襲うことが目的じゃない。  
だつたら、ね。

僕はレーザ・サーベルの電源を切り、吸血鬼の胸に飛び込んだ。  
やわらかく、僕を抱きしめる吸血鬼。  
カルネアそつくりな顔の、白い頬を、うつすらと朱に染めた、歓喜の表情が飛び込む直前に見えた。

「ああ、わかつてくれたの?  
久しぶりね、ナクタルシータ。  
あなたが生きているって聞いた時の、私の喜びがわかる?」

本当に、あなたが生きていてくれて、嬉・・・しい・・・わ?」

僕は、突き飛ばすよつこ、吸血鬼から飛びのいた。

「あのさ、言つたでしょ。

僕は、ダイルつていうの。

ナクタルシータなんて、長つたらしく名前じやない。理解できる?

僕はわざと、呆れたよつに溜息をつく。

ウーンダイルも長つたらしいと言われたら反論できないけどね。まあ、ダイルつて名乗る方が多いから、問題ないでしょ?

吸血鬼の腹には、拘束具、の一部。

一見ベルトのよつな、金属でできた、腹部を覆うリング。一つでも、拘束具のパーツをつければ、こっちのものだ。不思議そうにそれを撫で、そして、僕を見る吸血鬼。

そこには、どういう反応が正しいのか、判断しかねて困惑する顔が。

「僕からのプレゼントだよ」

僕は口元だけで笑つて見せ、つられたよつに吸血鬼はほほ笑みを形作ろうとした瞬間、固まつた。

マヌケ。

演技もほどほどにしないと、ねえ。

演技のためとはいえ、警戒心持たなきやだめだよ。

腹に装着された拘束具から何本もの、メタリックな光沢をもつた帶が伸び、吸血鬼の腕を、足を捕えていた。

一瞬で、両手足を自身の体に強制的に密着させられている。

身じろぎした吸血鬼はバランスを崩して倒れ、先ほどの網と同じように力で引きちぎりつとしているのか、みしみしと帶がきしむ。僕はすかさず残りの拘束具のパートを首に、両手首に、両足首に装着。

同時に帶を解除。

吸血鬼の体 首、手首、足首、腹 に六つのリングが取り付けられた。

確か、拘束具が完全に取り付けられると、内側から針が出て、薬が注入されるって話。

どんな薬だか知らないけど、捕えられた吸血鬼は体に力が入らなくなるようだ。

持続時間は、個体によつて多少ぶれがあるけど、約3日、だつたかな??

「Jの薬、量産できたらもつと僕らの仕事が助かるんだけど、吸血鬼一匹に効き目のある量を作るのに、それはもうすこい時間がかかるんだとかで、なかなか手に入れることはできない。  
だからこそ、生きたまま捕獲される吸血鬼つて貴重なんだよ。

どうして今回、急遽であるはずなのに用意できたかって??

「Jの薬の開発者つて、ロバートなんだよ。

開発者のところだから、ストックがあつて、当然。そうじゃない?

完全に拘束具が取り付けられた吸血鬼はすでに薬が効いたのか、弱弱しく体をうごめかすが、それだけ。

それだけしか、動けない状態となつた。

何が起こつてゐるのか理解したのか、吸血鬼は顔を歪め、低く、小さく、唸り声を出している。

カルニアじゃないとわかつた僕に、遠慮や、容赦なんて言葉はないよ？

同じ顔で、そういうことされると、瘤に障るから、やめてくれないかなあ？

心の中でそう言い、僕はバイクに拘束具をつけた吸血鬼をバイクの後部座席に腹ばいになるように乗せ、ロープで固定。

ちゃんと座らせて、2ヶツにしてもいいんだけど、満足に動けないのに、姿勢を保つことなんてできないだろうし。

吸血鬼に後をとられるなんて、気分良くないし。  
はみ出した足は地面でこすれちゃうだらうけど、それは仕方ないよね。

「捕獲完了」。

今からそちらに帰還する。

準備はできてるの？？

僕はゴーグルでロバートに連絡を入れる。

「遅えよ。

誰に物を言つてる。

お前が手間取つてゐる間に余裕で終わつてゐたえの。  
さつさとそのお宝をもつて來い。

無傷で、だからな

ブツリと一方的に、通信を切られた。

はいはい。

じゃあ、バイクの速度はゆつくりめ、だね。

お待たせしました。

とりあえず、今までの約2倍の文字数でのHPです。  
これでもう少し話がスムーズに進めばいいのですが……

ダイル曰く、カルネアは偽物だったみたいです。

捕獲は完了しましたが、これからどういう展開にすべきか、まだ考  
え中です。

なので次話HPまで時間がかかりそうな気がします。  
がんばりますので、しばらくお待ちください。

また、誤字脱字報告や感想等、お待ちしています。

さつさと持つて来い、なんていわれたけど、僕はゆっくりとした速度でバイクを発進させた。

ロバートの言葉に反発したわけじゃない。

その逆。

例の薬の副作用でね、吸血鬼の再生能力が格段に落ちるんだ。だから、網に入っていた時と同じ速度でバイクを走らせたりしたら、このバイクからはみ出した足が、この吸血鬼の服と同じく網に入っている間に、吸血鬼の服は摩擦で所々擦り切れていたボロ雑巾みたいになっちゃうってわけ。

それじゃあ、貴重な情報源が台無しでしょ。

上手くロバートに言つて、情報を引き出さなきゃいけないんだから、期待通りの吸血鬼を持つていかなきゃね。

門にたどりつくと、永緑壁えいりょくべきの内側で、いつの間にか待機していた研究所員が門を解除してくれた。

門は内側からしか開かない仕組みになつてる。

けどね、僕ら人間に永緑壁は影響しないから、門を使わなくとも入れる。

壁、なんて名前が付いてるけど、僕らにしてみれば、單なる緑色の光だからね。

だから、わざわざ開けてくれなくつても、僕一人が内側に入つて解除すればいいんだよ。

それほどの手間じやない。

うーん、この研究員なりに労つてくれたつてことなんだろうなあ。ありがとうね、お兄さん。

僕は軽く手をあげて礼を示し、国境の門を通過後、そこから一メートルと離れていない研究所の門を、やはり開けてくれた研究員に礼を示しつつ、ぐぐつた。

目の前には、ロバート。

僕はゆっくりとバイクを降りて、ゴーグルを外す。軽く頭を振って、顔にかかつた髪をかきあげた。

「戦闘人形つてーのは、単なる噂だつたか？」

ロバートが皮肉気に笑う。

僕はきょとんと首をかしげる。

「どういう意味？」

「たかが吸血鬼一匹に、存外、手間取つてたな。

噂じやあ、二十匹の吸血鬼に一人で囮まれようが、平氣で一匹残さず首を刈るつて話だつたが」

「二十匹は言いすぎでしょ。

噂にまとわりついた背びれ尾ひれが豪華だこと。

手間取つてたのは、ロバートが無傷でつて言つからじやないか。すつごく難しい注文したの、君だつてわかる？

僕はなんてことない、といった風に装つた。

これはポーズ。

自分の気持ちに引きずられ、無様なダンスを踊つてしまつたのは僕の失態。

けど、気にしてるなんて、気付かれたくない。みつともないでしょ。

「ふん、まあ、これだけ状態のいい吸血鬼が手に入つたんだ。存分に使わせてもらう」

ロバートはどことなくうれしそうだった。

嫌みがこれくらいで済んだつことは、上機嫌な証拠だろうな。

そう言つてゐる間にも、拘束具をつけられた吸血鬼は研究員たちの手によつてバイクから外され、担架で運ばれていく。

僕はそれを横目でちらりと見やつて、それから、ロバートに視線を戻す。

「それについてジエガンから伝言」

耳を貸せ、と言つジエスチャのつもりで、僕は口の端に片手を当てながら、自分の耳を指さす。

一瞬、ものすごく嫌そうに顔をしかめたロバートだったが、ジエガンの名前に負けたのか、僕の身長に合わせるように腰を屈めた。僕はロバートの耳に口を寄せる。

ロバートは一瞬、寄ってきた僕から逃げる素振りをしたが、それ以降は動ず、じっと僕が話すのを待つ。やれやれ、耳の穴に息を吹きかけたわけでもないのに。

敏感なのかな？

「あの吸血鬼でどうしても調べたいことがあるから、手伝ってくれつてさ。」

ちょっと、面白い情報<sup>モノ</sup>が手に入るかもしれないんだ」

僕は、敏感な耳のロバートの為に、言い終わるとすぐに離れ、にい、と笑つた。

ロバートの目が、興味深げにギラついた。

「話の内容によっては、協力してやらんこともない」とかいながら、ジエガンの頼みならロバートは絶対に断らない

ことを、僕は知つている。

「絶対君の役に立つ、かもね」

僕とロバートは、吸血鬼を運び込んだ研究室へと向かつた。

短いですが、切りがいいのでHPします。

研究室内に入つて一番最初に目についたのは、正面に設置された大きなガラス窓と、操作盤だった。

ガラス窓の向こうを覗くと、床がこちら側よりも低く、約1メートルくらいかなあ？ なつていて、機械類がひしめきあつた部屋だ。捕えた吸血鬼はその部屋の中央に置かれた椅子に寝かされていた。先日、僕が左手を修理していた時のモノと似たような椅子。

僕との違いは、拘束具の上から、ベルトで固定されていること。あとは、天井から吊るされた、いくつかのアーム。

研究室内にはすでに2人の研究員、1人はさつき門を開けてくれたお兄さんが待機していて、僕がこの部屋の説明を求めるとき、お兄さんが、嬉々として話してくれた。

不思議なことに、ロバートがそれを止めることはなかつた。

吸血鬼は、投与された薬で緩慢な動きしかできなくとも、椅子から転げ落ちるくらいならできる。

ベルトは、それを防ぐため。

怪我なんてされちゃ、大事な実験体なのにもつたいないつてところだろうね。

また、実験・処置などを直接人間が行つた場合、薬の効力が万が一切れた時に、吸血鬼に襲われる危険性がある。

アームは、それを防ぐために、部屋内の機械の操作を行う、人工の手だという説明。

アームの操作は、こちら側にある操作盤で行える、らしい。僕はその操作盤の使用方法までは聞かなかつた。どうせ、覚える気がない。

「それで、何を提供してくれるんだ？」

一通り研究員が説明してくれたあと、ロバートが言った。  
操作盤の前に置かれた椅子に足を組んで座ったロバート。  
僕は、室内にいるロバートの他、2名の研究員を見やつて、渋面  
を作る。

「この設備の説明をしてくれた彼らには感謝しているのだけれど、  
人払いしてくれる?」

これは、ジエガンの意向もあることだから」「  
と言えば、研究員を蹴りつける勢いで、ロバートは2名の研究員  
をドアの外へと追いやった。

恐るべし、ジエガン効果。

そしてごめんね、門のお兄さん。

「はつきり言うと、確約はできない。」

ただ、あの吸血鬼、今までの吸血鬼とは一味違うようだ、つてい  
うのが、僕らの意見」「

僕はガラス窓に背を向け、操作盤に寄りかかった。  
どういう風に話を持つていいのかと、考え考え、ゆっくりと話す。

「一味違う、というのは?」

少し、皿を眇めてロバートが問う。

「バイクのモニタで確認した限り、今までの吸血鬼より、ずっとイ  
ンテリジョンスなんだ。」

まず、言葉を正しく使える。  
会話ができるんだ。ちゃんと。

言語による意思疎通が可能つてこと。  
あとは、所作。

獸染みた感じが見受けられなかつた。  
なんていうのかなあ。

僕の言葉で言えば、今までの吸血鬼より、はるかに人間くさって感じかな」

珍しくない?とロバートの顔をうかがえば、目が、いや、顔が、ものすごい、気持ち悪かった。

ギラギラしてゐるのに、少年みたいに澄んだ好奇心に溢れてる…んだけど、それがはめ込まれてるのは中年のおっさんで。

違和感バリバリで、気つ色悪い。

ちよつと鳥肌立つちゃつたよ。

想像していた以上に、思いつきり食い付きがいい。じつちが引きそつだ。

「会話が成立できる、だと!?

それは、確かに貴重だ。

面白い研究が色々できそうだな。

ならば、まずは…」

一人でブツブツと小さな声で独り言を言い始める。完全に、一人の世界に没頭中。

ええつと、こっちとの会話に引き戻さなきや、僕の計画が台無しかも。

僕は、なにやら、一人の世界に没頭し始めたロバートをこちらとのコミュニケーションの場に引き戻そと試みた。

「…で、ジエガンが言うにはね?」

ジエガン、の名前だけでピクリ、と耳が動いたような気がした。ほんと、すごい効果だこと。

こちらにピタリ、と視線を向けてきたので、話を続ける。

「この吸血鬼の、記憶を見てみるはどうだうつて。

どうして、そういう風に育つたのかが、わかるでしょ?

直接聞くのは、薬を使つてゐる限り、難しい、でしょ?」

僕はゆつくりと、言葉を、ロバートの耳に染み入るように聞かせ

る。

その意味を、彼はきっと理解する。

これは、確信。

「…お前、何を言つてゐる?」

ロバートの顔が一変した。

ギリツと睨まれる。

そこに映るのは、嫉妬か、憤りか。知つたことではないね。

「とぼけなくともいいよ。

ジエガンからの指示を受けた時点で、アレの存在は聞いているんだから」

僕が含みを持たせてほほ笑むと、ロバートの顔は一層、険しくなる。

「アレとは?」

「それってさ、生態研究者が、言つ言葉じゃないね。

それに、僕は、これでも、ジエガンの子供、なんだよ?

どうして、僕が直接、しかも、たつた一人で来たのか、この意味、わからぬわけじゃない。

でしょう? ?

ロバートの顔を、じつくりと覗き込んだ。

研究者としての、ギラつくほどの好奇心など、今の瞳には伺えない。

そこにあるのは、燃えるような、黒い感情。

僕という存在に対する、苛立ち、かな。

ジエガンは、国内外を問わず、有名人だ。

ルテイル国軍の第三部隊隊長つていうこともあるけど、それ以上に、科学者として有名だ。

ジエガンはいろんなことを手広くやつてゐるけれど、主な研究は

医療器具と武器開発。

たとえば、僕の義手。

腕や足を失つた兵士が戦闘に復帰できるほどの性能をもつた義手や義足を開発したのは、ジェガンだ。

他にも、武器や防具の性能を飛躍的に向上させたのも、ジェガン。ジェガンのおかげで、被害にあつ兵士の数がずいぶん減つたんだそうだ。

その武器開発にあたつて、吸血鬼の生態を調べることは欠かせない。

そのため、ジェガンは昔、第三部隊隊長と、この研究所の所長を兼任していたらしい。

それは僕がこの国に来るずっと前の話。

2つも肩書を持っていたんじゃ、体がいくつあっても足りないとかいって、本当は自分の研究が自由にできないのが嫌になつて、やめちゃつたんだとか。

それも、僕が来るずっと前の話。

今では、ジェガンはザグラス一人を助手にして、研究を行つている。

たぶん、ジェガンがこここの所長をしていたころにはすでにロバートもこの研究所の所員だつたんだろう。

カリスマ的な所長がいなくなつたことも、ジェガンの研究に関われないこともショックだつたに違ひない。

そんな敬愛するジェガンの研究室に出入りができる数少ない人間今のところ、僕とガヴィーとザックだけの1人が、何一つ理解できない子供である僕なのが、許せないんだろう。

まあ、僕とガヴィーは自由には出入りできないんだけど、ロバートは知らないようだ。

もしそれを知つていたとしても、ジェガンの研究を理解できる自分は許されず、拾つてきた子供はOKなのが納得できないってところかな。

お待たせしましたー。

誤字脱字・感想等、何かありましたら報告をお願いしますーーー！

「…M - REPROD<sup>Hマーク</sup>のI」とかえ、ジエガンは…お前に何の価値がある」

よじかく、唸るように絞り出された、悪意の言葉。

そんなことより、僕はロバートがその機械の存在を認めたこと、内心ガッソローズ。

へえ、M - REPRODつていうんだ？

僕は、名称こそ知らないが、そういうことのできる機械があることは、知っていた。

だって僕、危うく被験者にされそだつたんだもの。自分の親ながら、そんな恐ろしいものの被験者に我が子を使おうとするなんて、怖いよね、まったく。

ロバートのいう価値云々でいうなら、僕はある意味価値があるのかもしれないけれど、それはとてもロバートが考えているであろうモノでは決してない。

ところで、M - REPRODという機械 というより設備という方がいいかな は、僕が知っている限り、この国にわずか2台だけ存在する。

それが、ジエガンの地下研究室と、ジエガンが所長をやっていた、此処。

ジエガンのところに持つて行くのは色んな意味で危険。

そういうこともあって、此処以上にこの吸血鬼を持ち込むのにはぴったりな場所はなかつたんだよね。

「どうする？ やる？ やらない？」

やるなら、僕は立会人として同席するけれど。

やらないなら、インテリジョンスだということは内密に。

何するのかは知ったことじゃないけど、普段やってる吸血鬼の研究になら使用してもいい。

それができないというのなら、すぐに僕が切って捨てる。  
ああ、もし疑われるような研究を行うようだつたら、ジエガンだつて黙っちゃいない。

「OK?」

僕は首を傾げて尋ねる。

「……おれは、ジエガンにたてつく気など、ない。

彼が望むのなら、それは未来への確実な糧の足掛かりだ」「敬愛してやまぬ人物のために、軽蔑してやまぬ人間の言葉を聞く。それがどんな、屈辱なのか。

彼の顔が、奇妙に歪んで、同意した。

少なくとも、僕はその言葉を同意の言葉と受け取った。

「では、ロバート＝ゾーイ博士、始めていただきたいのだけれど?」「ここにその設備はない。

場所を変える。

あの吸血鬼は、お前が運べ

ロバートは低い声で言つと椅子から立ち上がり、吸血鬼のいる部屋へと通じるドアを開ける。

僕に否やはないので、ロバートの後ろに続いた。

僕の力で吸血鬼一人を運ぶのは難しいので、何とか車椅子に乗せロバートは手伝ってくれなかつた。落ちないように固定した。そしてロバートがいるはずの方向を見ると、彼のすぐ傍の、壁だつた部分に穴が開いていた。

いや、この場合、穴というのは適切じゃない。

ぽつかりと空いている様は穴だけれど、これは入り口、だ。

「何コレ。隠し扉とかベタすぎない?」

思わず笑つてしまいそうなのをこらえる。

「M - REPRODは簡単に非人道的行為を可能にする。

そろそろ誰かに使われでもしたら大変なことくらい、アホなお前でもわかるだろ。

この研究所でその存在を知っている奴は俺だけだ。

俺だけに、ジェガンが教えてくれたのに

最後の言葉は、ロバートとしては小さな咳きのつもりだったんだろうけど、ばつちり聞こえてしまった。

ああ、ほんとにジェガンが好きなんだなあ、と思つて、聞こえないふりをしてあげた。

「そうだね、厳重に管理されてしかるべき代物なのは認めるよ」

僕がそうコメントするのを合図に、ロバートは入り口内へと入つていいく。

僕が車椅子の吸血鬼と一緒にそれに続くと、自動的に入り口が閉まつた。

入口から先は、それほど歩くことがなかつた。

上下左右、足元灯以外何も通路を幾分も行かないうちに、ドアが一つ。

ロバートは、その横に取り付けられた指紋認証盤に手をあてた後、暗証コードを入力した。

ドアが左右にスライドすると、そこに現れるのは、狭い空間。人が15人も入つたらギュウギュウだらうなあ、と思われるその空間の正体は、エレベータだ。

中に入ると、慣れた圧迫感とともに、下降している感じがする。今までおとなしく、身じろぎすらしなかつた吸血鬼は、慣れない感覚だつたのだろう、一瞬体を震わせていた。

「どうして、秘密の施設つて地下に作りたがるのかなあ？」  
僕はロバートに話しかける。

「すぐに閉鎖できるからだ」

無視されると思っていたのに、意外にもロバートは答えてくれた。  
結構面倒見いいよね、君つて。

けど、言われた意味がよくわからなくて、首をかしげる。

「部外者の侵入があつた場合に、天井が崩落したらどうする？」

ロバートに言われた言葉に、僕は眉をしかめた。

「そういうことだ」

ちらりと眺めやつた僕の表情に、理解したと判断したのか、ロバートはそれ以上何もいわなかつた。

エレベータはまだ下降を続けている。

体感的に、かなりの距離を下降した感じがあるのにもかかわらず、だ。

エレベータの速度と乗つてからの時間を考えると、おそらく200mは下降したことになるんじゃないかなあ？

ジエガンの地下研究室も、これと変わりなく、かなり地下につくられている。

当たり前だ。

発案者が同じなのだから。

要するに、不都合が起きた場合に施設」と埋めてしまえばいい、つてことだらう。

深度の深い場所につくれば、例え地上が陥没したとしても、施設が地上に現れることはないだらう。

なんというか、大胆な発想だ。

様々な憶測が、僕の頭に浮かんでは、霧散する。

まったく、ぞつとするね。

我が家ながら、ジエガンは怖い、と改めて思つた矢先、エレベータは停止した。

おまたせしました。  
よろしければ、感想ください。

エレベータのドアが開いた瞬間、僕は逃げ出したくなつた。  
というのも、部屋に先客がいたのだ。

それも、3人も。

先客は、僕がよく見知った人間たち。  
ジエガン・ガヴィール・ザグラスだった。

あー、もう。

終わった。

僕の計画、台無し。

つていうか、穴だらけだつたつてことだ。

なんてことだらう、情けない。

半ばやけくそで、心の中で僕はお手上げという感じに万歳をした。

「それじゃあ、始めるかのう」

ジエガンの言葉にはつとしたときには、握りしめていた車椅子の  
取つ手をロバートに奪われていた。

「副隊長はこちらへ」

呆けた状態の僕はガヴィーに促されるまま、用意された椅子に座  
らされる。

「おとなしくしててくださいね」

ガヴィーは優しく頭を撫でるけど、ちつとも嬉しくない。

吸血鬼を見れば、ザックとロバートによつて車椅子から降ろされ、  
M  
REPRODハイブリッドにかけられるところだつた。

「…最初つから、僕は監視されていたの？」

吸血鬼の記憶が、強制的に読み取られ始める。

僕はM・REPRODを体験したわけじゃないからわからないけ

れど、痛いのかな？

吸血鬼が体を何度も痙攣させているのを、僕は投げやりな気持ちで眺めていた。

「そうです」

僕の右側に立っているガヴィーが、きつぱりと答える。

ジエガン・ザック・ロバートの三人は、M - REPRODの操作や、強制的に引き出された記憶の整理に忙しそうだ。

「もつとも、我々が警戒していたのは、あなたが国外へ外出することでしたがね」

「で、僕が動いたから、後をつけたってところ？」

「目的地が、吸血鬼生態研究所だとは思いませんでしたがガヴィー自ら、僕をつけたってことか。

どうりで、第3部隊本部で、誰にも会わなかつたわけだ。すべては、彼らの仕業。

国外に出る者は、必ず装備を身につけていく。

そうじやないと、吸血鬼に襲われた時にひとたまりもないからだ。僕は自分の装備を本部にしか置いていない。

必然的に、国外に行くなら僕は本部に一度寄りざるを得ないってこと。

つてことは、僕を泳がせるために、わざと本部は人払いがされていたつてことだ。

自分の至らなさに、舌打ち。

こんなことなら、自宅にも装備を置いておくんだった。

いや、自宅から動いた時点でばれてたから、それも意味ないか。

「優秀だよね、ガヴィーって」

「ありがとうございます」

皮肉なんだけど。いや、それがわかつての反応か。

「で？ どうして先回りできたのかな？」

「ゾーイ博士から隊長に問い合わせがきたそうで」

「僕が装備をとりに行っている間、かな？」

ガヴィーは頷くことでそれを認めた。

僕はロバートを忌々しげに睨んだが、ロバートは作業に集中して

いて気付かない。

いきなり訪ねてきた僕の言葉だけじゃあ、真偽がわからないから、ジェガンに問い合わせたといったところか。

マッド・マディなんて言われても、そこは常識的な大人だったか。

いや、違うな。そこに思いたらない僕が子供つてこと。

ジェGANのことだから、僕の考えを簡単に見抜いたに違いない。じゃなければ、ここにいるはずがない。

ロバートにも協力を要請して。

ロバートがジェGANに協力しないわけがない。

内心、舌打ち。

まんまと騙された。

君は立派な役者だよ、ロバート。

さあて、どうしたものか。

次の手は、すでに決まっているのだけれど、それは僕自身がどうこう出来ることではないんだよね。

実行に移してもらつていいんだけどさ、問題は僕がどうこう風に

言い逃れできるか、だなあ。

「副隊長。

なぜ、件の吸血鬼との接触するでもなく、別の吸血鬼を捕獲してきたのですか？？」

考え方をしていると、ガヴィーがもつともなことを聞いてきた。そう。君は僕の尋問係つてことなんだね。

「クバチとは接触したよ。

たまたま捕まえることができたのはこっちの吸血鬼だっただけ」

下手なウソをつくのは適当ではないと判断して、僕は客観的事実

を口にする。

「クバチとはどんなやりとりを？」

「どうして、別の吸血鬼を捕えなければいけなかつたんですか？」

「クバチと接触はしたけれど、会話は一切なかつたよ。

なにせ、無人バイクを使ったからね。

クバチはバイクを見つけてすぐ、その辺に僕がいなか探しに行つちゃつたし。

そここの吸血鬼はその場に残つたから近づいた瞬間に丁度いいから捕まえた。

捕まえた理由…、ねえ？

ほら、君も前言つてたじやないか。

何で自分のことを知つてゐるのか、どういった目的があるのか、じつくり尋問したいつて。

僕もそれには賛成だ。

彼らが僕をナクタルシータと呼ぶ理由とか、知りたかった

「副隊長、それはM - REPRODを使用してまで知りたいことなんですか？」

「だつて、捕まえるのには、あの薬が必要じやないか。

そうしたら、口の筋肉だつて緩慢になるんだから、まともに喋れなくなるでしよう？

それだつたら、そここの装置を使って記憶を引き出した方が早いじゃないか。

違う？

「確かに、記憶を引き出す方が、下手な尋問を行つよりも早いかもしません。

しかし、なぜあの吸血鬼がクバチと同様だと判断したんですか？

通常の吸血鬼かもしないでしよう

「少しだけ話した。

僕に会いたいか？つて聞いたら、僕の姿が見たいつて言つから、

捕獲して僕に会いに来てもらつたんだ」

「…副隊長。ザグラスがクギを刺していたはずです。

どうして、わざわざ自分からコンタクトをとるような真似を?」

「純粹な興味。

何をしてくれるので、何を見てくれるのか、何を聞かせてくれるのか、気になつたから」

「カルネア、という名の吸血鬼が関わっていたからでは?」

僕はその名前に思わず目を見開いて、ガヴィーを凝視してしまつた。

そしてすぐに心の中で舌打ち。

また、失態だ。

ガヴィーは吸血鬼に目を向け、尋ねた。

「あれが、カルネアですか?」

僕は沈黙を守る。

口を開くと、また失態を犯しそうな気がしたからだ。

あれは、カルネアじゃない。

けれど、カルネアへの手がかりだ。

あれは、あの吸血鬼の記憶は、僕だけのモノ。

ジェガン達には、渡さない。

さて、どうやつて彼らを出し抜くかな?

35（後書き）

遅くなりました；

大人たちの方が一枚も二枚も上手でした。  
けど、ダイルはまだまだ粘ります。

感想等、お待ちしてます！！

短いです。

「隊長の話によると、少なくとも半日は時間がかかるようですね。  
どうしますか？」

吸血鬼の記憶の読み取り作業が始まつてから15分ほどたつた頃、  
ガヴィーが沈黙を守る僕に話しかけてきた。

「どうするつてー？」

まさにどうするか、考えているところだけど、邪魔しないでくれ  
る？

そう思つたけれど、口にはしない。

投げやりに応えながら見上げてきた僕に、ガヴィーはアゴヒゲを  
撫でながら苦笑いする。

応えてくれただけ、先ほどの沈黙よりはましだとでも思つている  
んだろうな。

「僕のままにしておるのもいいとは思いますがね、上に戻つて飯で  
も食いませんか？？

我々にや、結果が出るまで手が出せない領域ですしねえ」  
ご飯ねえ。

僕が僕のままにしておる」とはないからつてこいつは遣いな  
のか。

それとも、僕との気まずい雰囲気を変えたいってことだらうか。  
一番可能性があるとしたら、僕にこられたは困るつてことかな。  
さあて、どれかなあ？？

「食べるのはいいんだけど、気になることがいくつあるなあ  
優しい僕は、彼の気遣いに応えることにしてあげた。  
「気になること、ですか」

首を傾げるガヴィー。

「僕はここに来る際、ロバートの指紋と暗証番号が必要だった。

出でいくのにそれが必要ないとしても、もう一度ここに戻るのには、それが必要でしょう？

「どうやってここに戻るつもり？」

「それなら、問題ありませんよ。

読み取られた情報は隊長たちが本部へ持ち帰るはずです。

ここに戻る必要はありません」

選別されて、問題のない情報だけ僕に公開するつてことかな。

「あ、そうなの？」

「じゃあいいや。で、どこで何を食べるの？？」

「言つておくけど、ガヴィーの手料理なんて食べたくないからね？」  
僕は意外なほどあっさりとガヴィーの提案を了承してあげることにした。

まあ、この場にいない方が僕にとつても都合がいいし、ガヴィーが証人になってくれるのなら、なおのこと、好都合だ。

「いやいやいや、アンタ俺の料理食つたことないでしちゃうが。  
これでも、『意外と食える』ってリタには好評なんですか！？」  
立ち上がり先ほど乗ったエレベータにさつさと向かう僕にガヴィーがすぐに追いつきながら訴える。

ちなみに、リタとはガヴィーのパートナのことだ。

「え、本当に手料理喰わせる気なの！？」

「まさか。俺の手料理はリタ専用です！！」

惚氣か。

エレベータ内でも、ガヴィーの惚氣を含んだ不毛な会話は続いた。

お待たせした割に短くてすいません…

今後の展開がまだ未定のため、ちょっと次話も時間がかかりそうですね。

気長にお待ちいただけると幸いです。

「コツコツコツ、と僕は皿の端をフォークで叩いて訴えるけれど、ガヴィーは黙々と食事を続いている。

我ながら行儀が悪いとは思うけれど、頬杖をついてジトリとガヴィーを見つめる。

コツコツコツ、としつこく同じことを続けていると、耐えきれなくなつたのか、ガヴィーが口を開いた。

「何か、言いたいことが?」

「ああ、耳が遠くなつちゃたかと思つたよ」

「誰がだコラ。まだまだ若いわ、ピチピチの40代目前だコラ」ジトリとにらんでくる、ガヴィー。

「ピチピチとかキモいわおつさん。四捨五入で40のくせに。僕なんか四捨五入したらまだ10歳だ。

僕みたいなのをピチピチというんだおつさん」「

「単なる子供じやねえかガキ。肌なんぞアンタだつて歳とりや衰えるんだ、ガキ。

本題はなんだ、ガキ」

ケンカ腰で言葉を放つてみると、期待通りにケンカ腰で答えてくれるガヴィー。

なんてーか、律儀だな。

「これ、寒氣がするくらいますいんだけど。

誘つたからには美味しいもの食べさせてくれると期待したのに、がつかり通り越して残念だよ」

「残念つて何だ、残念つて。

あなた、オレの安月給把握してるだろうが。

「盲もん食いたきや、給料上げるよ上司」

「いやいやいや、そういうことはジエガンに言つによ。

僕に君の給料底上げする権限ないし。

それに、残業代でいくらか多く稼いでもるでしょう？

「ほら、僕のおかげで」

「ソーデスネー。副隊長の逃亡癖のお陰でデスクワーク溜まる一方ですもんネー？」

「お前は…つたぐ、表に出ひ出や、喧嘩なら高く買つてやる」

「事実ですよ。あと、現金前払い以外は受け付けませんよ…」

「…ザグラス。なぜおまえが答える？」

うんざりした目でガヴィーは隣に座る同僚を見た。

そこには、これ以上事態を引っかき回すな、という思いが込められていてるに違いない。

ちなみに、ソーデスネー、の辺りからがザグラスのセリフである。

例の吸血鬼の捕獲から、1週間が経っていた。

その後、特に僕の生活に変化はない。

変化がない、ということが僕にとっては問題だった。

まず、この一週間、壁外へ出て行く機会が2回。

その時にクバチもしくは関係のありそうな吸血鬼からの接触は全くなかった。

これに関しては、まあ、それほどといつことでもない。むしろ、あつちも慎重になつたかなと思うくらいだ。

僕にとって、一番の問題は、ジエガンらの態度。

ガヴィーと食事をして本部に戻つて仕事 僕の大好きなデスクワークをここぞとばかりにガヴィー監視下でやらされた を行つてから半日後、ジエガンとザックは本部に戻ってきた。僕の執務室に来た彼らは、渋い面持ちで僕に告げた。

“記憶が消えた”と。

以下、僕の回想。

「なーに？記憶喪失宣言？」

意味がわからず、僕は首を傾げて聞き返した。

「ちがうわい。ワシの記憶力なめんなこのガキ」

ジエガンがムッスリとした顔のまま、執務室のソファに腰を預けた。

「よつこりしょ、と爺くさい掛け声とともに」。

「ジジイの記憶力なんぞ、たがが知れてるでしょう？」

だいたい、主語つけないから相互理解できないんだよ。

ちゃんと伝える気、あるの？」

「例の吸血鬼の記憶ですよ。

データが、消失しちゃったんです。『よつそりと』

ジエガンは疲れているのか、それ以上何もいわない。その代わりに、応えたのはザグラスだ。

「何それ？ 操作ミスで『データ化しちゃったってこと？』

「違います。M - REPROD<sup>ムーリプロダ</sup>で読み取った記憶がデータ化して記録装置に転送されるネットワーク段階で消えたんです。

調べてみたところ、読み取った記憶がデータ化されるのと同時に消えてしまつんです」

「原因は？」

社交辞令で聞いてみただけだったけど、聞いたところで後悔した。不明ですが、予測としては、と前口上の後に続いたザックの話は、はつきりいつてちんぶんかんぶんだ。

機械のことを説明されたところでよく理解できない僕は、首を傾げるばかりである。

「よーするに、記憶装置に取り込んだはずの『データがないんだよ』

それくらいならわかるだる、と面倒くさそうにジエガンが言つ。

「えーと、考えられる原因を是正してもう一度記憶を取り込めばいいんじゃないの？」

「無理だな」

それに対してもジエガンはきつぱりと応えた。  
理由を聞けば、簡単だった。

例の吸血鬼が、死んだからだ。  
原因是、M - R E P R O D の負荷だという、僕にとっては納得しかねるものだつた。

遅くなりました……

ほんつと、そんな理由納得できないと思わない?  
人間よりも何倍も丈夫な吸血鬼で、そんなことになるのなら、人  
間にあの機械を使つたらどうなることやら、おかしな話でしょ。  
人間に使うことを前提にして作られたんだから、それはありえない。

記憶をとつてしまえば、あとはどうなつても構わない、なんて非  
効率的すぎる。

そもそも、そんなものをジェガンが作る訳ないし、作つたとして  
も実動を可、にする訳がない。

僕の考えとしては、原因はM - REPRODじやない。  
何か殺さなきゃいけない理由が、もしくは状況があつたんじゃな  
いかなあ。

それか、死んだことにしなきゃいけなかつた、か。  
ジェガン達が何がしたいのかわからないけれど、僕はそれ以上追  
及するの後回しにした。  
だつて、僕が欲しいものは手に入つたし。

例の吸血鬼から得た記憶は今、僕の手元にある。

僕の優秀な“彼女”が研究所のネットワークに侵入して根こそぎ  
奪つたからだ。

彼女曰く、追跡できぬいどころか、痕跡さえ残さないよう徹底し  
て侵入した、らしい。

彼女の仕事なら、ジェGAN達にはそれがなぜ消えたのかさえ分か  
つていないとと思う。

実際、ザックも小難しいことを言つていたけど、原因不明だと言  
つていたし。

ばれることはあまり心配していない。

僕は小声で罵りあつてゐる　お前もつと言ひ方つてもんがあるだろうとか、あなたが甘やかすからこんな生意氣に日々増長するんですとか、子供の教育方針で意見を交わす熟年夫婦みたいな会話を展開している　部下一人をちらりと見てから立ち上がつた。

突然立ち上がつた僕に彼らは疑問の視線を送る。

「ガヴィー、ごちそうさま。

僕もう行くよ。

これ、食べ残しでもいいなら食べちゃつて。

じゃあ、お疲れ様

僕はヒラリと手を振つて部下一人を店に残し、出て行つた。  
せっかく御馳走してもらつておいてなんだけどさ、最悪塩くらい使おうよ、つていうくらい味のない料理をこれ以上食べる気にはなれなかつたし、やつと、明日は休日なんだ。

例の吸血鬼の記憶を、“彼女”がカテゴライズしてくれてゐるから、それをゆつくりと一人で観賞するつもり。

“彼女”との楽しい休日を思い描きながら、僕はまっすぐ、家路を歩いた。

僕が部屋に入ると、勝手に照明が付き、夕方の終わりが近づいた薄暗い部屋を一気に明るくする。

「おかえりなさい」

無機質な、いつもの“彼女”的声が、僕の耳に届くと、僕はほつと息をついた。

「ただいま

知らず、口元に笑みが浮かび、姿の見えない“彼女”を見ようと、視線は天井をさまよつた。

「やつと、休暇がとれたよ。おまたせ」

「お疲れ様」なのは、あなたの補佐官たち、かしら？？

くすくすと冗談っぽく笑う“彼女”が僕の眼に浮かぶ。

「そのとおり」

神妙に僕は頷いた。

ふふっと彼女が笑う。

「それで、お楽しみの上映会は、いつじろ開始する？？」

「今すぐでいい、と言いたいところだけれど、シャワーを浴びてきていいい？」

汗でべとべとなんだ」

僕は襟元を右の人差し指に引っ掛け伸ばす。

「どうぞ、」<sup>1</sup>自由に。データは逃げないわ。消えることはあっても

「そんなイージィなミス、君がやるとは思えない」

“彼女”の許可を得た僕はクロゼットから着替えやらを適当に引っ張り出しながら話す。

「あら、わからないわよ。

データが膨大だから、バックアップはとつてないし。

バックアップしようとした場合、メモリチップがどれだけ必要か、あなたわかる？」

「僕がわかるのは、君が膨大といつくらいだから、相当量だつてことだけは判断できる。

けれど、君のことだから、僕らに関連しそうなデータはバックアップしてる、でしょ？」

「それくらい頭が回るなら、シャワーなんて浴びなくとも、緊張はおさまつたんじゃない？」

彼女の応えは、肯定でも否定でもなかつた。

その応えに僕は、意地悪く笑う“彼女”が見えた気がした。

「ああ、君は僕以上に僕を知っている。

「それでも汗臭いのに変わりはないからね」

苦笑いを浮かべながら、僕はいつたん、シャワールームへ向かう。

確かに僕は、あの吸血鬼の記憶が、僕に何を見せてくれるのか、

楽しみだけど、多分怖くて、それは緊張といつ言葉がしつくつくる  
気がする。

待ちに待つた上映会なのに、未だに自分を焦りしているんだから。  
多分ではなく、確実に、“彼女”的言ひ通り。

「どうだつた?」「

“彼女”はカテ「ライズの作業時点で、データの内容をすべて把握している。

僕がどんな反応をするのか、気になっていたんだろう。

僕はほう、と溜息をついた。

「おおざっぱにまとめるなら、人知は未だ、無知に等しい、だね」  
2時間の上映につき、30分の休憩をいれる、というルールで始めた上映会。

それを4サイクルをこなしたところで、僕は音を上げた。  
それまで“彼女”は僕の求めるままに黙つて映像を繰り出していくが、やつと感想を聞いてもよいと判断したようだつた。

「驚いた?」

「驚いた…、そうだね、衝撃的だ」

目を酷使しすぎて、頭痛がする。

僕はどさりとお気に入りのベッドに身を投げた。

照明の光が、勝手にほんのり明るい程度に調整される。  
「少し寝るでしちう?ずつと、起きてるものね」

「うん、疲れたよ。

あとで、ね。おやすみ」

「ええ。おやすみなさい」  
照明が、完全に消された。

眩しい。

ゆつくりと開いた眼に映るのは、窓。

カーテンを透過する光が、眩しい。

時刻はわからないが、昼みたいだ。

「お田覓め？」「

“彼女”の無機質な声。

「おはよっ」

あいさつをしながら僕は仰向けになるよう転がると、腹筋の力だけで起き上がる。

「それを言つには、遅すぎるわ」

言われて時計に目をやれば、午後3時前だった。

彼女の言つ通りだ。

「準備は？」

彼女が聞く。

「今から始める」

僕は天井を見上げてから、ベッドから降りた。

シャワーを浴びた後、戦闘服に着替え、装備を確認する。食事を済ませてから、保存のきく食べ物を適当に見繕つてバイクに乗せた。

バイクに跨つて、ゴーグルを装着すると、通信が入った。

「忘れ物は？」

聞こえてくるのは彼女の声。

「あるよ。沢山」「

僕が冗談めかして言つと、彼女が笑つた気がした。

「沢山忘れ物があつたとしても、私を置いていくのはやめてよね

「わかつてゐるよ。今から迎えに行くよ」

「よかつた。じゃあ、私は準備万端で待つてるわ。

忘れ物なんて一つもなく、ね

それができる君が、僕は少しだけうらやましい。

僕は彼女を迎えて行くべく、バイクのエンジンをかけた。

遅くなりました……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2975m/>

---

紅い瞳に映る赤

2010年12月22日21時55分発行